

日 本 体 育 学 会

体育心理学専門分科会会報

第6号（通巻第34号）

体育心理学専門分科会

1994年8月31日発行

は じ め に

徳 永 幹 雄 （九州大学）

日本体育学会で分科会活動が始まったのは、昭和36年と聞いています。すでに、30数年の歳月が流れていることになります。

私どももその流れに沿って平成5年4月から、体育心理学専門分科会の事務局を担当することになりました。前事務局の山崎勝男先生（早大）から送られてきた段ボール2箱にびっしり詰められた過去の資料を眺めていると、その歳月の流れを痛感しました。手書きの原稿のまま、ガリ板刷りの資料がほこりにまみれて、うずくまっていました。必要なものは製本して残しておきたいと思っています。

これまで九州の地で、のんびりと過ごし、中央での企画に参加するのみでしたので、ことの重大性を強く認識しています。

まず、過去の資料の整理をすることを思い立ち、事務局の変遷、シンポジウムのテーマ・演者、会報等の整理をしてみました。多くの方々が分科会活動に関与され、多くのテーマが討論されてきたことに感心し、今後の課題を考えているところです。資料は巻末に示したので御覧ください。

事務局の最初の仕事として、専門分科会の会員の要望を調べることにしました。上田雅夫先生（早大）の好意で、事務局移転の挨拶を兼ねて調査して頂きました。その結果は巻末に記載のとおりです。

その中で、取り敢えずやれることとして、平成5年度の体育心理学専門分科会の総会で提案したとおり、つぎのことを計画しました。

第1は、研修会と懇親会の開催です。本年度は日本体育学会のプレ・セミナーとして、大会前日を利用して行うことにしました。

第2は、会報の発行です。多くの要望の中からシンポジウムの内容紹介、地方での研究活動、研究室めぐり、海外情報、博士号取得者の紹介などを掲載してみました。

そのほか、体育心理学専門分科会には会則がありません。また、現在の年会費1000円は他の分科会に比較すると格安です。会則については他の分科会の会則を参考にして、早い機会に検討したいと思っています。

さらに、スポーツ心理学の台頭で、体育心理学との研究分野の整理の問題、日本体育学会一般発表の審査の問題、そして日本体育学会のマンモス化にともなう専門分科会の在り方など課題は山積しているようです。

会員の皆様のご協力を得て、活発な分科会活動ができるように努力したいと思っています。

平成6年7月8日

目 次

はじめに	徳永幹雄（九州大学）	1
I. 日本体育学会第44回大会関連報告		
1. 体育心理学専門分科会シンポジウム		
テーマ	ーより効果的なメンタルトレーニングを求めてー	
司会	星野公夫（順天堂大学）	4
演者	窪田 登（早稲田大学人間科学部）	5
「競技における心理的構えの有効性とその獲得の仕方」		
徳永幹雄（九州大学）		7
「メンタルトレーニングは現場の練習プログラムになぜ乗らないのか」		
成瀬悟策（九州大学名誉教授）		10
「運動機能とこころの自己コントロール		
ースポーツ選手のための心理的トレーニングー」		
2. シンポジウム傍聴記		
「心理臨床には『センス』が必要だ」	竹中晃二（岡山大学教育学部）	12
3. キーノートレクチャー		
「分科会30年の活動をみて将来を考える」	鷹野健次（川崎医療福祉大学）	15
II. 日本体育学会第45回大会および関連学会の案内		
1. 日本体育学会第45回大会		17
2. 各種関連学会の大会開催予定		29
III. 地区別研究会活動		
1. 関西地区	滝 省治（甲子園大学）	30
2. 九州地区	徳永幹雄（九州大学）	31
IV. 研究室めぐり		
鹿屋体育大学スポーツ心理学研究室	谷口幸一（鹿屋体育大学）	33
V. 海外だより		
フロリダ大学に留学して	高妻容一（近畿大学）	35
エモリー大学に留学して	森 司郎（東京学芸大学）	37
VI. その他		
1. 博士号取得者紹介		40
2. 体育心理学専門分科会選出の日本体育学会の役員		41
3. 体育心理学専門分科会事務局の変遷		42

4. 体育心理学専門分科会会報一覧	43
5. 体育心理学専門分科会シンポジウム一覧	45
VII. 事務局報告	
1. 日本体育学会評議員選挙結果	54
2. 体育心理学専門分科会活動についてのアンケート結果	54
3. 総会議事録	56
4. その他	58
編集後記	

I. 日本体育学会第44回大会関連報告

1. 体育心理学専門分科会シンポジウム

日 時 平成5年11月18日

場 所 大阪国際交流センター

テーマ より効果的なメンタルトレーニングを求めて

司 会 星野公夫（順天堂大学）

演 者 窪田 登（早稲田大学人間科学部）

「競技における心理的構えの有効性とその獲得の仕方」

徳永幹雄（九州大学健康科学センター）

「メンタルトレーニングは現場の練習プログラムになぜ乗らないのか」

成瀬悟策（九州大学名誉教授）

「運動機能とこころの自己コントロール

ースポーツ選手のための心理的トレーニングー」



（星野公夫先生）

司会

最近では、心理臨床学会の会員が日本心理学会の会員よりも多いという状況になってきており、体育・スポーツにおいても、心理臨床について関心が出てきたといってもよいと思います。そんなこともあって、臨床心理学に関するシンポジウムを企画するようという話がありまして、私としては身にあまる話でございます。

臨床心理学では、通常、ノイローゼだとか対人関係のまずさ等心理的にノーマルからマイナスへ逸脱した人達を対象としますが、健康な人をより健康にすることを目指す臨床心理学も、また、大事なことです。体育・スポーツの世界でも、問題を持った選手を

いかに回復させるかは大事ですが、強い選手をより強くする、健康な選手をより健康にするということも臨床心理学の大きな役割だと思っています。

しかし、ここには、検討を要する二つの大きな問題があると思います。

一つは、心理学は人間の行動の原理・原則を追及することが大きなテーマですが、人間の行動の原理・原則を追及する手段・方法というものが、方法論として、個人を伸ばすという臨床心理学にそのままでは適用できないのではないかということです。

次は、個人の問題点がわかれば、それを解決することでその個人がもっと伸びると簡単にいう向きもありますが、選手の問題が理解できることと、選手に問題への対応の仕方を教える、援助することとは、全く別の次元と捉えなければならないことです。

本シンポジウムが、一人の選手を伸ばすにはどうしたら良いか、メンタルトレーニングが現場で取り入れられるためには心理学が何をしなければならないか、を考える一助にでもなればというのが企画者としての私の願いです。

窪田登先生には、重量挙げ選手であった立場から、経験を踏まえ、体育心理学への期待・要望について、徳永幹雄先生には、研究と実践（現場）との橋渡しを如何にすべきかについて、成瀬悟策先生にはスポーツ選手のメンタルトレーニングの具体的方法について、それぞれのお立場から語って頂きたいと思います。

窪田 登先生：

1. 重量挙げをやるようになった動機について

私が重量挙げをやるようになったきっかけは、私が幼少の頃、長兄がトレーニングジムを開設してしまして、私にとってジムに通ってくる青年の筋肉が短期間で発達することが印象深く、自分も将来これをやってみたいと思うようになったことです。いわゆるボディビルディングです。しかし、日本



（窪田 登先生）

ではボディビルディングのコンテストは昭和27年に初めて行なわれたので、当時、トレーニングの成果を発表する場はウエイトリフティングしかありませんでした。ウエイトリフティングは、現在は2種目（スナッチ、ジャーク）で競技をしますが、当時は3種目（プレス、スナッチ、ジャーク）の時代でした。私の場合、重量挙げといっても、ボディビルディングを意識して多くの種目（50種類以上）を使ってトレーニングしました。少ない種目でトレーニングすれば、もっと記録は伸びるはずなので、本来出せる記録より低いもので終わった気がします。

2. 練習方法について

私は絶対に失敗しない練習をしようと心掛けました。その練習方法には人に勧められ

ない方法もありますが、以下のとおりです。

- 1) フォームを正確に行う練習。
- 2) 最悪状態でどのくらいの記録が出せるかという練習。
 - ①ウォーミング・アップなしでヘビーな重量への挑戦。
 - ②徹夜したときや睡眠不足のときにヘビーな重量への挑戦。
- 3) 今日何kg挙げてみせると公言する。
- 4) 自分よりも弱い人との練習では、その弱い人と自分との記録の差を読み、その差が少しでも広がるように心掛ける。

3. 施設と記録との関係について

施設、用具の設備と記録との関係はさしてないと思います。昔の選手のトレーニング施設は非常に劣悪でしたが、その中で多くの世界記録が生まれました。現在ではトレーニング場は非常に整備され、室内に器具もたくさんありますが、記録の伸びはそう大きなものではないと思います。その背景には精神面の影響が大きく、記録達成への気合いや意志、あるいは精神の統一などが強く介在していたと思うのです。

4. 積極的思考と目標設定について

私は、積極的な思考、ポジティブ・シンキングを重視しています。例えば、135kgをもう少しのところで失敗したとすると、「もうそろそろ挙げることができるな」「挙がるはず」「挙げた」と考えるのです。つまり、ウェイトリフティング競技は記録が数字に出るために、数字へのこだわりがあるのではないかと思うのです。自分自身振り返ってみると、プレスの場合、90kgに第1のバリアがありました。これを越すと95kgに伸びます。次に、100kg、120kg、130kgと山場があったんですが、これは自分で思い込んでいた節があります。世界記録を作るタイプの選手というのは、私とは違って、記録、数字にこだわりがないという気がします。

また、目標の設定をうまくしないといい記録は出ません。例えば、私がローマオリンピックを目指した時、世界ランキングを自分で作ってみて、10位だったらこのくらいという記録を設けました。こうして自分で設定したところまでは記録が向上してオリンピックには出場できたのですが、それ以上には伸びませんでした。私の場合は、多少目標の設定が甘かったのかもしれませんが。一方、東京オリンピックで450kgを出せば世界記録で優勝と私たちコーチ陣が踏んでいた選手の場合ですが、彼は私たちの目標どおり、1962年には390kg、1963年には420kg、そして、1964年、東京オリンピックの10日前の練習中にその450kgを出してピークに達してしまっただけです。しかし、そのあと調子が落ちてしまい、コンディショニングの難しさを痛感したものです。

つまり、積極的な思考をしながら適切な目標を設定する、というところにオリンピッ

クで勝負をものにするコツがあるのかなと思います。火事場の馬鹿力をだせるような仕組みをどうやって作るかというメンタル的な面が非常に重要なのではないかと思います。

(文責：高柳茂美)

徳永幹雄先生：

1. アンケートは何の役にも立たない

「アンケートは何の役にも立たない、忘れた頃結果をもらう、またアンケートか」、これは現場の指導者からよく聞く話です。



(徳永幹雄先生)

これに対し私たちはアンケートから実力発揮度や競技成績を予測できるようなテストを開発する必要があるのではないかと思います。しかもスポーツ選手の心理的「特性」と「状態」を調査する方法を開発する必要があります。そして、少なくとも10日以内には調査結果をフィードバックしてやる責任があります。さらには結果の説明会や個人面接を行うことを怠っていた気がします。私たちが作った心理的競技能力診断検査(DIPCA. 2)の内容は、5つの因子と12の尺度にわかれています。こういう内容が今まで精神力といわれていた内容ではないかと思います。一般に使われている精神力というのは、ある時は集中力であったり、ある時は予測力とか判断力であったりというように使い方が非常に抽象的に使われています。もうすこし精神力の内容を分類して診断する必要があるのではないかと思います。

このテストを使って競技成績と実力発揮度との関係を見ると、心理的競技能力の高い人は競技成績が良く、実力を発揮しています。選手は技術や体力とともにこれらの心理的特性を高める必要があります。ただ、これだけでは実際の実力発揮度や競技成績の予測率は低いので、試合中の心理的な状態を診断するテストを開発する必要があります。たとえば、私共は心理的パフォーマンス診断検査(DIPP. 1)を開発しました。そして、実力発揮度の自己評価との相関をみると、非常に高い相関がみられました。しかも、特性としての心理的競技能力とも高い相関がみられました。

これらのことから、「特性」を高めれば「状態」が高まり、「状態」が高まれば実力発揮度も高まり、競技成績も高まるという関係を明確にすることができました。つまり、競技パフォーマンスをより高い確率で予測できるテストを開発していく必要があります。

2. メンタルトレーニングはどのようにすればよいのか

次に、メンタルトレーニングは何をどのようにすればよいのかということをよく聞かれます。これまでのメンタルトレーニングは実験室で行うもの、いわゆる心理的スキルの基礎練習を多くやってきました。たとえば、リラクセーション、集中力、イメージト

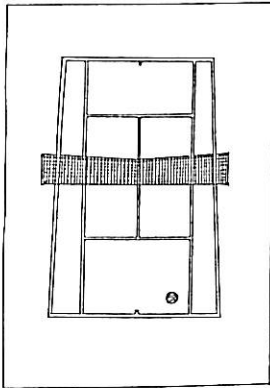
レーニングについて、多くの先生方がいろいろな方法でやってきました。しかし、もう1つ現場に役に立たない、現場に取り入れられないというのは、実験室で練習してきた内容が実際の練習場面や試合の中でどのように使われるかについての指導が、今ひとつ欠けていたように思います。私たちは次のようなトレーニングシステムでトレーニングしています。最初に心理的競技能力の診断、その後、目標設定、リラクセーション、集中力、イメージ、そして練習の中でのトレーニング、本番、試合後の反省を行い、それを何度もフィードバックしていけば、特性としての心理的競技能力が高まり、実力発揮度も高まるであろうというように考えています。窪田先生も言われましたが、メンタルトレーニングの中で目標の設定に関して、私たちはあまり力を入れなかった気がします。目標の設定に多くの時間をかけて、明確な目標を立てる必要があります。あるいは、目標が達成された時の効果とか、それを阻害する要因とか、自己宣言とか、そういうことも含め目標設定の指導に、もう少し時間をかけていくべきだと思います。

リラクセーションのトレーニングではいろいろな方法があります。最近バイオフィードバックの機器が開発されて、客観的な評価がしやすいので、現場でよく使われています。リラックスを練習した後に、たとえば深呼吸を指導した場合には、実際の試合の中でどういうふうに活用されるかということまで指導しておくことが大事です。部屋の中でするときは、「目を閉じる→深呼吸をする→全身の力をぬく→両手を温かくする→額を涼しくする」、いわゆる「頭寒足熱」というような身体の状態になることを目標にしています。

集中力のトレーニングも非常に難しいですが、方法はあると思います。1つは注意を集中する練習と騒音などによって注意をそらされないようにする練習です。ストレスをかけて集中力をトレーニングすることが大事になります。逆に苦しさから注意力をそらす練習も大切だと思います。

次にイメージトレーニングです。これはイメージカードです。小さなカードの中に自分がしているスポーツのボールとかラケットなどを描きます。例えば、そのボールに自分の注意を集中する練習をします。そして目をつぶっても、その残像が消えないようにします。何秒間くらいまで残っているかを計測すれば、1点への集中のトレーニングができるように思います。イメージはすぐには浮かんでこないもので、基礎練習として好きな色とか好きな風景やスポーツの用具や競技場のイメージなどの静的で動かないもの、感情が入らないものなど基礎的なものを練習する必要があります。基礎的イメージの練習をして、自分の課題になるトレーニングをイメージを使ってします。これは例えば、学生に自分のピークパフォーマンスを絵に描かせ、その絵を見てイメージに描かせました。そしてそれを実際にやってみたときの感想を書くように指導しました。例えば、テ

ニスコートのイメージカードですと、この中にボールをおいて自分のボールを操作します。どこに打って、返ってくるボールをどこに打つかをカードを見ながら頭の中で描き、自分で戦術のトレーニングをします。そして目をつぶってもそれができるようにイメージカードを使うのも良いのではないかと思います。



テニスのイメージカード

次は、動きからみた心理面のトレーニングです。これはテニスのメンタル・タフネスで有名なジム・レーアも言っているんですが、実際のプレーの中で、心理的な能力が動作の中にでてくるように指導しようということです。ここにテニスのラケットをもってきたんですが、例えば意欲を示すというのはラケットヘッドが下がっていたら意欲を示してない。こういう風にラケットをたてたほうがより意欲的です。あるいは、じっとし

ていると意欲を示していないので、このように前傾姿勢になって足を動かしはじめることが意欲がある、というように指導するわけです。また、リラックスはテニスをするときは右手（利き手）で打ちますが、プレーしていないときはラケットは左手で持ちましょう。そして右手はいつもリラックスしておきましょう、というようにリラックスを動きで示すわけです。さらには、集中を動きで示したり、イメージを動きで示すわけです。本当にイメージしているのかということを動きの中で示すように指導したらどうかということです。

次の段階は試合前の心理的準備です。そして本番、試合後の反省と続きます。ここまでの一連の内容がメンタルトレーニングだと思います。

3. スポーツ心理学者に何ができるか

メンタルトレーニングが現場の練習プログラムになぜ乗らないのかについては大会の抄録に書きましたように、次のようなことが考えられます。

- 1) 役に立つアンケートを作成すること、
- 2) トレーニング内容を明示すること、
- 3) トレーニング効果の判定法を作成すること、
- 4) 生理心理的アプローチを導入すること、
- 5) トレーニングの方法の具体例を示すこと（時間、回数、期間など）です。

また、スポーツ心理学者がどれぐらいメンタル面の指導に関与できるかについては、

①来談者型の指導として一般希望者、或は呼び出し、呼びかけをして自分の研究室を中心とした指導があると思います。次に、②出張型の指導として講演や講義等による指導、練習場・合宿所等での指導、競技会場や講演会場での心理相談の開設、公共のスポーツセンター等での心理相談の開設が考えられます。そのほか、③電話によるカウンセリングなども考えられるでしょう。

以上のようにスポーツ心理学者が積極的に現場に出ていかない限り、メンタルトレーニングを現場に取り入れる方法はなかなか生れてこないような気がします。時間がきましたので、また後ほど。

(文責：徳永幹雄)

成瀬悟策先生：

1. リラクゼーションについて

まず、最初に、身体^{からだ}や筋肉が“ゆるむ”、“動く”ということと、“ゆるめる”、“動かす”ということとは、はっきり区別をつけます。身体がゆるむということは生理的現象ですが、ゆるめる、動かすというのは身体の持ち主である主体の活動の話であり、身体や筋肉を活動させる最も基本的な条件ですから、この両者をはっきり区別して話を進めていきます。リラックスをするというのは身体をゆるめるもので、心は関与していないと受け止められがちですが、ゆるめるということは筋肉を緊張させるよりもはるかに難しい心の活動です。



(成瀬悟策先生)

以前は、自律訓練法の温かくなった感じがリラックスした状態だと考えていました。しかし、これは心身の全体的なリラックスという点で非常に重要なことではありますが、それだけでは間に合わないのです。本当に身体をゆるめようと努力するためには、局部的にゆるめようとする必要があり、そのために、動かすというところの活動が大切です。例えば、肩を制御しているところの部分が緊張しっぱなしの人は生理的にも肩がこりますが、その部分を自分で動かせるようになると、ゆるめられるようになります。

競技場面で緊張しないように自分でゆるめられることが大事ですが、もっと進んだ段階のリラクゼーションになると、日常生活の中でいかに自分が緊張しているかがわかってきます。もっと進むと、緊張しそうな予感の段階で処理できるようになってきます。こういうことは、心理的な無意識活動が調和的・整合的に統合されていくことであり、それが大事だと思っています。ゆるめられるようになるということは、心が身体の隅々にまで行き渡ることであり、それを実感として理解できなければいけません。

2. イメージについて

イメージは、実であって虚です。一流のスポーツ選手ではイメージが非常にはっきり出てきます。しかし、メンタルという語感の虚なる感じ、それを現実のものとして実感できることがイメージであると考える必要があり、虚なるものをいつまでも虚のままにしているはいけません。しかも、視覚は身体環境によって異なるので、自分で競技している場面を傍観的視覚的に見ているようなものはなかなかものになりません。ある実験で、「走っている自分が見えていたのに、途中からガタンと変わって視覚的なイメージが消えてしまい、走っている自分の身体の動きの感じが出てきた、それからあまり疲れなくなった、びっくりしました」という学生がいました。身体の体感、動感といったイメージ、しかも、虚なるものが実のように体験できるような練習をしないとなかなか役には立ちません。

3. メンタルトレーニングとメンタルリハーサル

メンタルトレーニングでは、イメージだけではなく実際に身体を動かしてみることも必要です。トレーニングの時は充分にリラックスするということが非常に大事です。特にスポーツ選手は型が決まっていますが、リラックスすることは型を崩すということ、つまり、すっかりゆるめて自分の型に捉われない状態で筋肉を動かす努力をするということです。すなわち、これは、自分の身体に聞くということなんですね。課題を決めて、イメージを流し、身体にまかせてしまう。充分にリラックスした心でいると、身体の動きの感じで自分の身体の具合の善し悪しがよくわかるということがあります。それから、意図的な目標があれば、それをイメージの流れに任せてみます。流すというのは、自分にまかせるということで、そこで、自分のくせが出るのでそれを変化させなくてはいけません。その時に介入して変えていく工夫が必要だと思います

もう一つ、メンタルリハーサルについてですが、イメージを一度リハーサルで流すと、本番で不思議なくらい競技にスーッとはいっていけるリハーサル効果というものがあります。それは、リハーサルそのものがイメージで、非常にビビッドに含まれているからだだと思います。また、リハーサルすると駄目な部分が非常に誇張されることがありますが、その時には、こちらイメージで介入してうまくいくようにします。それから、具合の悪いところは自分で距離を取り注意するということもありますが、イメージの段階で、望ましい形のものにある程度改良して変化させると、本番でもだいたいその通りになっていくものです。

(文責：高柳茂美)

2. シンポジウム傍聴記

心理臨床には「センス」が必要だ

竹中晃二（岡山大学）

〇〇先生が〇〇選手と合って話をしたら金メダルが取れた。米国ではやりのビジュアル何とかをやらせたら勝てた。〇〇先生のゲーム采配はすばらしい。なにせ、スポーツ心理学の先生だそう。さすが。

こんな話はもうたくさんだが、と考えていた私にとって、今回のシンポジウムの内容を、新鮮に、しかも興味深く聞くことができました。星野先生の解説の後、まず、窪田先生が御自分の経験や指導場面における心理的な問題を主観的立場から述べられました。次に、徳永先生はアスリートに対するメンタル・トレーニングを系統的に、いままでの問題点と合わせてまとめられました。研究のアプローチが近いせいでしょうか、また今夏の国際生体行動・自己制御と健康学会のシンポジウムでの御発言の印象と重なったせいでしょうか、私にとっては、徳永先生の登場を小気味良く思えました。徳永先生はその国際学会シンポジウムでフロアの質問に答えて、アスリートのメンタル・トレーニングの効果は勝敗や競技成績で評価されるのではなく、そのアスリートがいかに日頃の力が出し切れたかどうかを問題にするべきだ、とグレーな世界をクリアにする発言をされました。話題提供の最後に、成瀬先生は心理臨床会の巨匠のお一人として、リラクセーションとイメージについてのお話をされ、特に五感で実感できるイメージを作ること、「虚」なるものを「実」として体感する重要性を述べられました。特に、「ゆるむ」と「ゆるめる」という表現は、自らの心身を緩めようとする現象における主体的な活動様式を重視したもので、私はこのお話にすごく感動しました。シンポジウムが終了し、皆さんはこのシンポジウムの内容に納得顔で、とりわけアスリートに対して臨床的アプローチを行っている先生方は、余韻を楽しみながら退場したように私には見えました。私も大変良いお話だったと思いました。しかし、なぜか、わき腹に訳のわからないイライラ感が残りました。

大阪は私のホームグラウンド、例のごとくその夜はお酒を飲んで楽しく過ごし、次の日そのイライラ感について考えました。おぼろげながら気づいたことは、心理臨床って「アート」なんだということです。「アート」だから、成瀬先生のお話は、何か神秘的でフワフワと人にわかったような気にさせてしまうんだなと。しかし、私のような素人には、その実体がなかなか見えてこない。ムードはよいがなぜか酔えないお酒ということ

ころでしょうか。私自身ではわかったような気になっていながら、本当のところ具体的なことは何一つわかっていなかったのだと。私は心理臨床にはまるで素人です。だから、手続きや評価という考え方にこだわってしまい、そのため何か形になったものを要求してしまいます。しかし、通常「アート」に数量化は似合いません。評価は主観によって決定されます。たとえば、この作品は好きだけど、あの人のはどうもね」というように。反対に、世間が評価を作り上げているということもあります。そういえば、心理臨床の人は、「私は〇〇先生のところで勉強させてもらっています」というような表現をよく使ったなと思い出しました。その人の実力とは関係なく、それだけで、その世界では認められるということでしょうか。そこで、私は考えました。「アート」には必ずセンスが必要だなと。センスは生得的なものでもあるし、磨く努力も必要です。センスを持てば立派な「アーティスト」になれる。そう考えると、センスがなくて、実験したり、調査して、有意差を見つけて喜んで発表してる自分は何をしているんだろうと思ってしまいました。

ここまで来て、はっと目覚めたのです。あっ相撲取りとフットボウラーが同じ土俵で相撲しているように、言語も違う、文化も違う、目的も違う、手段も違う者同志が、いかにも同じと考えて話をしているんだと。そこで、また考えました。成瀬先生が撃破したように見えた生理学的評価の質問に対しても、決して先生がおっしゃるように単なる「発表用」として済まされるものではなく、知的好奇心を満たすのはもちろんですが、因果関係を探ったり、手法や手続きを一般化するためには大事なことなんだと。そうなんだ。この「発表用」分野を、「アート」と一緒にしてしまっただけではいけないんだと。そう考えると、苛立ちも消え、もとの楽しい気持ちにもどりました。結局、自然科学的方法論に馴染むものと馴染まないものがあり、それをどう捉えるかそれぞれの分野で発展してきたのだと考えることができます。アスリートを扱う場合、色々なアプローチがあってよく、それぞれが意味のあるもので、そう考えるとお互いの良い所を尊重し、お互いにうまく付き合ってきたことが大切なんだと実感しました。これしかないんだということはないんだから。思い起こせば、このシンポジウムでは、スポーツ競技のコーチと思われる先生の質問が見られました。たとえば、こんな選手がいるんだけどどうしたらよい式の質問です。私のように、センスのない人間にも、競技スポーツのコーチや監督はこの種の質問をします。私個人の考えでは、コーチングに心理的要素は必要だけれど、基本的には、コーチはコーチの立場で試行錯誤しながら「正解」を見つけ出し、それが彼らの仕事だと思っています。だって、アスリートに直接、しかも密接に関わる人物はスポーツ・サイコロジストじゃなく、涙や汗を共有するコーチなんですから。その意味で、アスリートへの心理臨床的アプローチはより分業化、専門化されるべきで、コーチ

が「片手間」に扱うようなものでは決してないように思えます。もっと言えば、専門化には専門化としてのセンス、知識、トレーニングが必要で、それらを求める手段として、たとえば「臨床心理士」などの資格取得も必要だと思います。ここで誤解のないように述べておきますが、資格をもっていることと、その人に能力があるかないかという問題は別の次元です。しかし、心理的プロパーの人達と比べると、私達体育・スポーツ領域の人間は、心理学一般の知識やトレーニングが不足していることも認めざるを得ません。この事実を素直に認めて、私達は「片手間」がまかり通っている現状をなんとかよい方向に向ける努力を始めるべきです、その意味で「臨床心理士」のような資格を持つことは、最低限の能力を保証し、その後の研修を受けるためのスタートラインに着くことを意味しているのではないのでしょうか。スポーツ界心理臨床の世界でも、片手間アーティストではなく、本物のアーティストがもっと育て欲しいと願います。

さて、偉そうなことを言ってる私はといいますと、どうも私にはセンスがないのですが、最近山中寛先生（鹿児島大学）と一緒に仕事をする事が多く、そのためお酒を飲む機会が増えたせいでしょうか、心理臨床がおもしろいと思うようになってきました。心理臨床にもこれしかないという方法があるわけではなく、色々な型があっていいのではないのでしょうか。私自身は、現在、生理心理学的アプローチにこだわっているけれども、近い将来は全く反対の極と考えられている心理臨床との架け橋を自分で作れたらすばらしいと考えています。最後にちょっと、こんなレシピで、すばらしいアスリートを育てて見ませんか。

材料：4カップの自覚、1カップ1/2のオープンな心、2カップの自己管理と自己統制、2リットルの一貫性、1カップの信念、2カップの忍耐力、2カップの能力、1カップ3/4のイニシャティブ、2カップの粘り強さ、3カップの熱意

「自覚」と「野心」と「オープンマインド」をふるいにかけ、「野心」と「イニシャティブ」をよくまぜる。「根気」と「忍耐力」と「信念」を少しづつ加える。「熱意」と「一貫性」をかきまぜる。「自己管理と統制」をなめらかになるまで攪拌する。すべての材料をよくまぜあわせる。「決心」というオープンで焼き上げ、冷やして「常識」を上にもう薄く塗る。その後、食し、よく消化する。

（AIS Sport Psychology Bulletinより〃引用）

3. キーノートレクチャー

分科会30年の活動をみて将来を考える

鷹野健次（川崎医療福祉大学）



藤善尚憲先生（司会）

司会者：

「分科会30年の活動を顧みて将来を考える」というテーマでキーノートレクチャーを鷹野先生にお願いしました。しかし、体育心理学専門分科会30年の回顧と将来の展望というのは余りにも範囲が膨大すぎますので、特に学会創草期における活動を中心にお話しをお願いしたいと思います。

鷹野健次先生：

体育心理学の沿革については、松田岩男先生の「体育心理学」の第1章に非常によく書いてあります。体育心理学としては、「体育研究所」の松井三雄先生から始まったということですが、それ以前がある訳です。ライプチヒの実験室にならって、日本では松本亦太郎先生が東京大学、京都大学でやっていきます。我が国の心理学の実験的な研究が画期的に進んだ当時については、



（鷹野健次先生）

「日本心理学会50年記」（昭和55年）に出ています。松田先生の手本は、松本亦太郎先生の「精神動作学」（大正3年）に起源を持っています。そしてそれは、田中寛一、寺沢巖男、松井三雄先生らが引き継いでいきます。それが主流になりますが、もう1つの体育心理学の沿革としては、後藤岩男先生のゲシュタルト心理学からのアプローチがあります。昭和15年に「最近体育心理学要論」が出されています。

ところで、大正13年に開設された「体育研究所」ですが、松井三雄先生のそこでの研究については、先生自身の回顧が学校体育（昭和40年）に3回にわたって出ています。松本亦太郎先生の「心理学講和」（大正12年）によると、「心理学研究は理論の研究のみでなく、応用的研究に力をいれねばならぬ。応用の意味は2つあって、1つは心理学の理論を他の学問、例えば教育学の論述の根拠にする。今1つは、心理学の研究を人間の実生活に及ぶ方面に応用する。」としています。松井先生の話でも、松本先生が応用心理学に非常に力を入れていてね・・・といったことをなにかの折りに聞いたことがあります。体育研究所での西洋的な研究、つまり実験的な研究、これは当時としては一番他の方面に貢献すると考えられていました。そういったものをものにしたのは、それ以前の20年の実験心理学の当時があったからだと思っています。

松井先生は、「航空研究所」から「体育研究所」の方に開設と同時に命令されるわけです。松井先生は、行ったものの若いし何をどうやっていいのかわからなくなって初め戸惑っていて、それを見かねてかすぐ1年もたらずしてドイツ留学を命ぜられるわけです。小林晃夫先生、内田勇三郎先生などが研究の同志ですが、10年間の研究成果をまとめて出されたのが「体育研究所概要」です。これは1巻だけで2巻が出なくて終わったと思うんですが、それをみて下さい。そして、その体育研究所は昭和16年に廃止されました。

戦後、昭和24年には新制大学ができ、大学に体育が必修になったということと、専門家を養成する上での体育心理学ということで東京教育大学体育学部に入っていきます。そして、昭和25年に、日本体育学会が発足します。資料に、シンポジウムテーマのリスト（巻末に掲載）を載せていますが、分科会が公式に認められたのが12年目（昭和36年）です。体育心理学は、先に述べたような研究所時代のくさびがありましたから、分科会のスタートとしては、他の分科会よりも早かったわけです。

時間になりましたので、ここで切らせて頂きます。

（文責：瀧 豊樹）

Ⅱ. 日本体育学会第45回大会および関連学会の案内

1. 日本体育学会第45回大会

平成6年度の日本体育学会第45回大会は下記のとおり山形大学で開催されます。体育心理学専門分科会としても多彩な行事を組んでおりますのでご連絡致します。

日時：平成6年10月4日（火）・5日（水）・6日（木）

場所：山形大学

体育心理学専門分科会関係

プレ・セミナー 10月3日（月）

15:00-15:30 体育心理学の動向

米国応用スポーツ心理学会および北米スポーツ心理学会の動向

高妻容一（近畿大学）

15:40-16:10 訳本から学ぶ

「運動学習とパフォーマンス（調枝孝治監訳、大修館書店）」

久保玄次（愛媛大学）

16:20-17:20 博士論文紹介

「危機と人格形成」について

中込四郎（筑波大学）

18:00-19:30 懇親会 大沼ホテル 山形市白川町2-1-10

Tel：0236-32-1111

1日目 10月4日（火）

9:00-15:00 一般発表

2日目 10月5日（水）

キーノートレクチャー（9:00-9:40）

テーマ 「スポーツ集団の生産性と集団凝集性，リーダーシップ」

司会 杉原 隆（東京学芸大学）

演者 丹羽 劭昭（奈良女子大学）

総会（9:40-10:10）

シンポジウム（10:10-12:00）

テーマ 「優れたスポーツ集団をつくるための心理的スキルをめぐって」

司会 船越 正康（大阪教育大学）

演者 飛田 操（福島大学）

「リーダーシップスキル」

岡沢 祥訓（奈良教育大学）

「コミュニケーションスキル」

石井 源信（東京工業大学）

「目標設定スキル」

3日目 10月6日（木）

9:00-12:00 一般発表

キーノートレクチャー要旨

スポーツ集団の生産性と集団凝集性、リーダーシップ

丹羽劭昭（奈良女子大学）

スポーツ集団、生産性、凝集性、リーダーシップ、権限構造

1. 集団生産性とは

集団は、一般に個人では達成できない目標を実現するためのある種の意図をもって構成されている。集団生産性はこの目標志向的活動を規定する要因と考えられ、したがって集団目標の内容が集団の目標や課題遂行にどのような拘束的あるいは促進的条件として作用しているかを問題にする。

スポーツ集団の場合、集団の目標は各集団によって多少異なるが、多くは①競技力の向上 ②仲間とスポーツを楽しむことにまとめることができる。また③体育教育ではスポーツ（学習）集団によって教育的目標を達成するということがあげられるが、ここでは①②の目標に限定する。したがって生産性すなわちこれらの目標（課題）遂行に、集団凝集性やリーダーシップがどのように関わっているかを明らかにすることが必要となる。

従来のスポーツ集団の研究では、集団の生産性とは何か、他の集団的要因とどのように関係しているかを直接明らかにしようとしたものは殆ど見当たらない。そこであえてそうした視点でまとめると次のようになる。

集団の生産性は、集団の単なる一般的活動と混同されるべきではなく、集団活動のある種の次元のものに名付けられるものである。そのある種の次元を基本的な集団機能である①集団目標達成機能（Task Function）と②集団維持機能（Group Maintenance Function）と考え、この両機能と集団凝集性やリーダーシップがどのように関係するかということを考えてみたい。

2. 集団生産性と集団凝集性

ここでは集団凝集性を「成員に集団にとどまりまとまるように作用する心理学的力の総量」と定義する。いまスポーツ集団のTask Function を競技力向上に限定して考えると、体力、技術力、精神力と集団（人間関係）的要因が直接関係する。その集団内の人間関係的要因の中、特に戦績と密接に関係するのは、人間関係構造としての権限構造（集団の規範を決定する権限の所在から類型化された集団の構造）、モラル（志気）、

リーダーシップ、集団成員性などが考えられる。そしてこれらと関わりながらある意味では全体を包括する形で集団凝集性を考えることができる。もちろん生産性と凝集性さらには成員の満足度などとの間には、報酬配分の機構や集団の目標と成員の目標との一致、集団の意志決定への成員の参加等の媒介項が必要である。従来の研究では凝集性→モラール理論は、凝集性→モラール→生産性の3要因間に密接な関係があると考えている。一方、凝集性－魅力理論は、集団成員は集団の魅力に向かって成員がまとまり生産性を高めることを主張している。いずれも生産性と凝集性の明確な因果関係は確かめられていない。しかし集団魅力の源泉とTask Function が密接に関係することが次第に明らかになっている。すなわちTask Function はまず権限構造と密接に関係している。例えば、日本選手権をとるようなスポーツ集団では部員外型が圧倒的に多く、そのような構造型では、集団の威信の魅力が極めて強いことなどがわかってきた。したがって、凝集性－魅力理論は生産性と関わって、魅力－生産性理論として、その理論的・実証的研究の発展が期待される。

3. 集団生産性とリーダーシップ

リーダーシップは理論的には、個人的次元と集団的次元が重なりあう領域での現象で、個人的心理のダイナミクスを基礎に集団的機能として作用する。そしてリーダーシップは、集団内の種々の相互活動のコントロールを通して生産性に影響を与えるいわば集団生産性の門番である。その影響は受け手がリーダーを受け入れる程度に応じている。しかもリーダーを受け入れる程度は、リーダー選出への関わりとも関係があるので、権限構造型によって効果的なリーダーシップ型が決まってくる。例えば運動部の場合、部員外の人や少数の部内の主脳による指名または推薦という形でキャプテンが選出される部員外型や部主脳型では、部員はキャプテンがこわいからとか、実力があるからとか習慣的に従うというように、どちらかというとき上意下達の垂直型人間関係が特徴的である。したがって部員外型の運動部では民主的リーダーシップより権力型リーダーシップの方が効果が高い。他方、話し合いでキャプテンを決める部員型の部では民主的構造をもつ水平型人間関係が特徴的で、ここでは権力型リーダーシップは効果が少ない。日本では運動部の生産性と関係してP M型リーダーシップの研究が進んでいる。例えば課題達成機能からみるとP M型が他の3型より効果が高いというのが常識となっている。しかし相反するP (Performance) 機能とM (Group Maintenance) 機能とが、スポーツ集団のような機能集団の場合に共存することは理論的に矛盾がある。そこでP M式リーダーシップの因子分析的研究の結果、P 機能に圧力 (S) 因子と技術指導 (C) 因子があり、この技術指導因子が集団維持 (M) 因子と圧力因子を結ぶ触媒機能を果たしていることがわかってきた。そしてC, S, Mリーダーシップと権限構造型には明らかに対応関係

がみられ、両者間に双方向影響交換過程のあることがわかってきた。例えば男子の大学の運動部では監督・コーチのリーダーシップは、部員外型では技術指導やその複合した機能が集団生産性（強さ）に効果を発揮し、部員内主脳型では効果が少ない。女子学生の場合の監督・コーチのリーダーシップは部員外型では、圧力、技術指導、集団維持の各機能の複合型が効果を発揮するが、部員内主脳型では、技術指導と集団維持機能の複合機能が効果をもつ。当然、男女共、圧力機能のみの場合は、練習参加率は高いが、強さや集団魅力には効果を発揮しない。このようにスポーツ集団の生産性は監督・コーチやキャプテンなどの主脳者が、権限構造型に応じて、それぞれのリーダーシップを発揮することで、合理的に運営されていると考えられる。

シンポジウム要旨

優れたスポーツ集団をつくるための心理的スキル

司会：船越正康（大阪教育大学）

体育・スポーツ心理学 研究動向 集団機能 心理的スキル

体育学会発足当時の専門分科会は、体育原理、体育史、体育心理学、運動生理学、保健の5分野であった。その一翼である体育心理学専門分科会から、発育発達、測定評価、体育社会学が細分化した歴史は、現在の13分科会の名称に見る通りである。すでに45回大会を迎えた本学会を中心に体育心理学研究の動向を振り返ると、一般発表だけでも悠に2000件を越す蓄積があり、先達の努力を継承して新たな発展を期す意欲が湧いてくる。しかし設立後四分の一世紀・25周年の節目に纏められた“体育心理学研究の成果と課題”（体育の科学, 25-12, 1975）の中に、目を引く指摘がある。

鷹野と和田によれば、それまでの研究は①継続的研究が少なく研究成果が必ずしも定着していない。②目的に即した方法論や諸理論の検討が不十分である。③現場の実践に役立つ研究が少ない。④研究者の関心が特定領域に集中して発展性が少ない点が問題であった。それから20年、昨今の研究成果は、これらの諸点をクリアしえたであろうか。

1982年の秋から5年間、本分科会の事務局を担当した折、それまでのシンポジウムの推移を整理する機会に恵まれた。すでにスポーツ心理学会が独立して活発に活動していたが、両者の取り上げたシンポジウムは大きく二つの流れに集約され、運動学習研究と運動適応研究が繰り返し討論されてきた。前者は実験心理学の手段を援用し、物理的法則定立に近い厳密な実証的研究を指向していた。それだけに基礎研究推進の自負心を持ち、実際の用には無関心の印象すら与えていたが、フィールドワークの導入によって指導現場の理解を得始めたようである。一方、後者は既製の心理検査と簡単な質問票に頼り、数が多いものの実態調査の域を出ていなかった。しかし、統計的手法の普及と併行して仮説検証型の研究が増加する進歩を見せ始めた。時代の思潮を先取りしたシンポジウムの企画が契機となって、一般研究の資質の飛躍が望めるならば望外の喜びである。

近年の動向はどうであろうか。専門用語ではない“集中力”問題を取り上げてから昨年の“メンタルトレーニング”（MT）論まで、関心は個人心理学、とくにスポーツや教育現場での心理学理論の効率的適用に向けられている。否、単なる諸理論の導入に止まらず、体育・スポーツ心理学プロパーの立場から実社会や教育場面に役立つスポーツ体験の応用

を試みたり、スポーツ効率自体を高めるための実証的研究や概念の確立に目が向けられ始めた。その背景には人々をとりまく生活環境の変化ばかりでなく、競技スポーツ界も様変わりしていく現実がある。何故に集中力の欠ける子が育つのか。かつては自立した一人の選手の課題であった競技努力が、どれだけ多くの他者の援助を必要とするようになったか。それらの変化につれて人々の関心が運動適応研究に注がれ、同時にそこでの成果を普遍化して日常生活を豊かにするための工夫に向かう。今はその道筋にあるように思う。

現在の進行は、あがりや競技不安、パナウト現象などの運動不適応研究から、プラス思考やイメージトレーニングなどのMTに代表される運動適応のための方策まで、実践に役立つ研究への挑戦が盛んである。そこではフィールドワークも統計的思考も多様に活用されているが、結果の特定を急ぎすぎるきらいはなかろうか。あるいは、かつての運動学習が指向した厳密さと比べて、研究計画に甘さの目立つものが多い気がする。どんな方法論の援用にも思考の徹底は欠かせず、確認された法則性に基づいて具体的個人の問題解決へ向かうものである。そのとき大きな比重を占める研究方向は臨床的思考であり、すでに臨床スポーツ心理研究会が活動しているのも時流の要請と考えてよい。昨年学会では症例報告を研究として承認すべきであるとの提案がなされた。これは精神病理学や臨床医学の重要な研究手法の一つであり、体育・スポーツ心理学研究の中にも徹底した報告例を待って討論を進めたいものである。

このような個人の問題解決に向けられた研究は、今後ますます加速され稔りある結果が期待できそうである。ところが、素材としては取り上げにくい集団心理の研究がほとんど手つかずの状態に残されている。運動適応と不適応を個人の問題として究明する方向とは別に、集団の力学から問い直す試みがあってもよい。しかしMTを初めとする競技心理の研究は個人種目を中心に追求され、その延長線上に個人レベルの法則性を対人競技に適用している段階である。社会心理学的発想を優先すれば、社会あつての個人、チームあつての選手心理がクローズアップされる場面は至る処に転がっている。発想を転換して、集団の機能効率を見据えた研究の開発が推進されてよいのではなかろうか。

本シンポジウムでは、初めに社会心理学会とグループダイナミクス学会に籍を置く飛田操氏に登壇願い、一般集団過程から掘り起こしてリーダーシップスキルに敷衍していただく。次いで体育学習集団を中心にコミュニケーションスキルを岡沢祥訓会員に、最後に競技スポーツ集団のデータから目標設定スキルを石井源信会員に提言していただく予定である。ここに取り上げた3スキルによってスポーツ集団の機能コントロールを語りつくせるものではない。さらにはスキルとして特定する要素主義的思考の限界もあるであろう。それらを踏まえた上で、直接的には競技パフォーマンスの向上に役立つ視点、間接的にはスポーツを離れた社会生活にも転移可能な、価値あるスキルの探索に貢献できれば幸いである。

優れたスポーツ集団をつくるための心理的スキル リーダーシップ・スキル

飛田 操（福島大学教育学部）

ここで私に与えられた課題は、優れたスポーツ集団をつくるための心理的スキルのうち、特に、リーダーシップ・スキルに焦点を当てて述べよというものである。これは、非常に困った。だいたい、「これがそのスキルですよ」などと提出できるような、そんな『理想的なスキル』というものが、存在し得るのだろうか、と考えられるからである。

もし、存在するとしても、それはきっと『部下の立場を理解せよ』とか、『自分の信念を貫け』といった非常に抽象的なレベルのスキルか、ぎゃくに、「ジーコのリーダーシップ論」や「大松博文のスパルタ式リーダーシップ」のような個々のケースに基づいた経験的なレベルでのスキルのどちらかにならざるを得ないのではないか。

しかしこれでは、実際の場面においては全く役に立たない。確かに、『部下の立場を理解する』ことは、優れたスポーツ集団をつくるためのひとつの重要なリーダーシップ・スキルであるとしても、ここには、「それでは、どうすれば『部下の立場を理解する』ことができるのか」についてのなんら含意が述べられていない。あるいは、大松監督や広岡監督は確かに大監督ではあるけれども、むやみとスパルタ方式で選手たちを鍛えたり、選手を管理しようとしたりすることが、全てのスポーツ集団に共通する有効なリーダーシップ・スキルであるとも考えにくい。

リーダーシップ・スキルを含めた社会的スキルは、自動車の運転にたとえられることも多い(Argyle, 1967)。自動車を運転する時、そこにはある場所に行きたいという「目標」や「動機」が存在する。自動車が、カーブにさしかかったときには、道路がカーブしていることが「知覚」される。この「知覚」は、「スピードを落として、ハンドルをゆっくり右に切る」という具体的な計画に「翻訳」される。そして、実際にブレーキを踏んで、スピードを落としながらハンドルをゆっくり右に切るという「遂行（運動反応）」がなされる。すると、車は、カーブした道に沿って、右に曲がって走るという「外界の変化」を引き起こす。この変化は、フィードバックされ、うまくカーブが走り抜けられたかどうか「知覚」される（相川、1994参照）。

確かにそこには、自集団や対戦相手の状態を正確に「知覚」すること、その状況に適したもっともふさわしい計画を立てるという「翻訳」をおこなうこと、そして、それを適切なかたちで伝達・行動して「遂行」すること、といったスポーツ集団を形成・発展させ

ていく際にも重要なリーダーシップ・スキルが含まれている。

ただし、スポーツ集団と自動車とは、そこに根本的な相違が存在する。そのひとつは、そこに主体的な行動や感情や意志が存在するかどうかであろう。自動車は、アクセルを踏めば、加速する。しかし、スポーツ集団は、アクセルを強く踏んでも、加速するとは限らない。右にハンドルを切れば、右に曲がるとも限らない。

こちらが「目標・動機」を持った主体的な存在であると同時に、（スポーツ集団に限らず、全ての）集団の構成員もまたそれぞれが「目標」や「動機」を持った主体的な存在であり、そこには、相互の影響過程が含まれているのである。アーガイル(1967)は、「目標・動機」、「知覚」、「翻訳」、「遂行」という自動車の運転スキルのモデルでは対人行動のスキルを説明できなく、そこに「フィードバック」の過程をとり入れた、より複雑で相互的なモデルが必要であると主張している。

このような視点をふまえ、ここでは、次のような点について、お話しする予定である。

- (1)「理想的なリーダーシップ・スキル」とは
- (2)「目標・動機」にかかわるリーダーシップ・スキル
- (3)「知覚」にかかわるリーダーシップ・スキル
- (4)「翻訳」にかかわるリーダーシップ・スキル
- (5)「遂行」にかかわるリーダーシップ・スキル
- (6)「フィードバック」にかかわるリーダーシップ・スキル

引用文献

- 1) 相川 充 1994 イギリスの社会的スキル訓練 菊池章夫・堀毛一也（編著） 社会的スキルの心理学 100のリストとその理論 川島書店.
- 2) Argyle, M. 1967 The psychology of interpersonal behavior. Penguin Books.
辻正三・中村陽吉(訳) 対人行動の心理 誠信書房.

優れたスポーツ集団をつくるためのコミュニケーションスキル

岡沢祥訓（奈良教育大学）

1. はじめに

素晴らしい教育効果をあげている教師は生徒から信頼されているだろうし、優秀なセールスマンはお客に信頼されているだろう。競技スポーツにおいても一番大切なことは、指導者と選手、選手同士の信頼であろう。もし、信頼が確立されていなければ、いくら練習しても、試合でよいパフォーマンスを期待できないであろう。この信頼関係は相互理解が正しくなされてはじめて確立されるものである。正しい相互理解には、正しいコミュニケーションが必要であることは言うまでもないことである。

2. 指導者と選手とのコミュニケーション

選手と指導者との間で一番問題になるのが、戦術に関する見解の不一致だと思われる。指導者の決定した戦術が、選手にとって不得意な技術を要する戦術である場合も多くある。そのような戦術を実行するために選手は不得意な技術の練習を要求されることになる。このように選手が不得意な技術を採用する場合、なぜその戦術を採用が必要なのかを理解できない選手は、指導者が本当に自分を伸ばそうと思っているのかどうかという不信感を抱き、不適応を起こしてしまうことになりかねない。

競技集団では、指導者と選手が共に過ごす時間が比較的多く、共通の目標を持っているので、お互いに相手のことを理解しあっていると思いがちである。それゆえ、言わなくてもわかっているはずだと思い込み、そのことを伝える努力はほとんど行わないという問題があるようである。

指導者と選手は一体ではないのだから指導者は、選手が理解できるまで自分の考え方を説明する必要があるし、選手は指導者を信じて、指導者の考え方を理解しようとする態度が必要である。競技集団では、強くなりたい、勝ちたいという最終目的は同じはずなので、お互いの立場を尊重してオープンマインドで話し合えば、誤解は生じないであろうし、人間関係がこじれることも、ないであろう。もっと理想的に言えば、戦術を決定する段階で、指導者と選手が本音で協議することが必要であろう。

3. 指導場面におけるコミュニケーション技術

指導場面におけるコミュニケーションに関する技術は、教師やコーチの指導行動分析を基に考えると以下のようになると思われる。

高橋らは生徒の授業評価と教師行動との関係进行分析し、賞賛や励ましは授業評価を高めるが、批判は授業評価を低くする傾向を明らかにしている。また、熟練教師は一般教師に比べて賞賛や励まし、発問が有意に多く、批判が有意に低い傾向があると報告している。この高橋らの結果は、欠点を指摘するよりも、よい点を誉めて長所を伸ばす指導法が生徒には受け入れられ易いことを示していると思われる。

コーチ行動分析は日本では殆ど行われていないが、アメリカ等で用いられているコーチ行動分析法で用いられているカテゴリーには、名前を呼ぶ、励まし・賞賛、非言語の報酬、言語による非難、非言語の罰等が分析されている。コーチ行動に関しても、名前を呼ぶこと、励まし賞賛を多くし、非難・罰を少なくするように心がける必要がある。

教師行動の分析を盛んに行っているオハイオ州立大学のシーデントップは、コミュニケーションは否定的に反応することによって妨げられることを指摘し、一般的にみられる障害の例として以下のような例を示している。

- 1) 命令し、服従を求め、指示を与えること。「おしゃべりをやめて集中しなさい」
- 2) 脅かすこと。「ぶらぶらするのをやめなさい。さもないと今度の試合に出しませんよ」
- 3) 説教したり、教化したりすること。「あなた達レギュラー選手は、そのように行動してはいけません。」「どうすればよかったの」
- 4) 早急に助言や解決策を与えること。「山田君にパスすれば、得点できただろう」
- 5) 価値判断をくだしたり、批判したり、非難すること。「君は本当に怠け者だね」「問題をおこすのはいつも君だ」
- 6) レッテルを貼ること。「幼稚園児みたいな行動をするな」
- 7) 厳しく詰問すること。「どうして最初にわたしにたずねないんだ。」
- 8) 気持ちをそらせること。「今は、それを話し合う時間がないんだ」

また、シーデントップはコミュニケーションを送る技術として、①あなたが言うことのオーナーシップをとること②価値判断するよりも事実を述べること③相手の視点を取り入れるように努力すること④感情に対して敏感になること⑤非言語的な合図に注意を払うことの必要性を述べている。

情報を受け取る技術として、①受け取ったメッセージを明確にするために意識すること②効果的に注意を向ける技術を用いること③情報の送り手の非言語的な合図に注意すること④自分自身の感情やそれがメッセージに及ぼす影響を考慮することの必要性を指摘している。

優れたスポーツ集団をつくるための心理的スキル

—目標設定スキル—

石井源信（東京工業大学）

目標設定スキル スポーツ集団 個人目標 チーム目標

【問題提起】

筆者に与えられたテーマである「目標設定スキル」は、経験的にも、個人あるいはチームの競技力を向上させるために、常につきまとうてきたあまりにも基本的でかつ実地的なスキルといえる。また従来からあまりに数多くの心理学的研究によって、目標設定の必要性とその効果が認められてきた。このように、多くのことが明らかにされてきているにもかかわらず、なぜ目標設定の価値についての議論がたえないのかを考えると、種目の特性、個人の特性、集団の特性などとりまく条件があまりに多いために実際場面での目標プログラムの設定および実行は意外に困難であるからであろう。

今回は、特に最近の若者気質を問題にしながら、優れたスポーツ集団をつくりあげていくために必要な目標設定スキルをいかに身につけさせるかといった具体的な方法論の提起をしたい。

【目標設定の意義とその効果について】

動機づけとしての目標設定は、個人の内発的動機づけを高め、意欲を持続させ、パフォーマンスを高める効果的なテクニックとして教育場面、競技場面などで有効に用いられてきた。Martens（1987）は、適切な目標設定は、練習の量や質を高め、身体的、技術的スキルだけでなく、意欲や自信や集中などの心理的スキルまでも向上させることができることを述べている。目標設定は、最も基本的な心理的スキルの手法のひとつであり、この意義を十分に理解し、選手自身が意外にあいまいにならざるをえない部分に焦点をあて、効果的な目標設定スキルを獲得するための原則および具体的な実行の方法を提示する。

【目標設定の原理・原則について】

目標設定に関連する多くの研究成果をまとめたものから目標設定の原理・原則をあげてみると以下のようなことがあげられている。

1. 一般的な目標よりもより具体的な目標を設定する。
2. 簡単に達成できる目標より、やや困難な目標を設定。
3. 非現実的な目標ではなく、達成可能な目標を設定する。
4. 長期的目標よりも比較的短期的な目標を設定する。

5. 結果目標よりもプレー目標を重視する。

6. チーム目標よりも個人目標を重視する。

これらのひとつひとつの原理・原則に従った目標設定を学習することが重要となるが、それぞれの対になる目標はどちらも重要であり、そのバランスを個人が自分の能力やチームという組織の中でどのように処理していくかがキーポイントになろう。スポーツで優秀な指導者やプレーヤーは、紛れもなく優れた目標設定家といえる。

【目標設定と実行のプログラム設計について】

目標の設定がきわめて重要であることはだれしも認めるところであるが、いざ各種スポーツで組織的にプログラムを設定し、継続して実施していくのは大変なことである。それは、いま現在の自分の能力レベルを基準にしながら、時間軸としての短期目標と長期目標、現実目標と理想目標課題内容としての技術目標と体力目標と精神力目標、集団の中でのチーム目標、ペア目標と個人目標、練習目標と試合目標などをそれぞれバランスよく実行することが要求される。また、目標とその達成度の評価のチェックをしながら、段階的にかつ継続的に進めることはかなりの長期にわたる計画と忍耐を必要とする。しかし、メンタルトレーニングの成果をあげていくためには、基本的なスキルとして位置づけて、組織的に行うべきである。

ここでは、Bump (1987) の目標設定の原則に従ったドリル形式のワークブックの紹介ならびにGarfield (1984) のピーク・パフォーマンスの評価表を利用した目標設定の技術を紹介しながら、優れたチームをつくるために指導者に必要な目標設定スキルの指導法をさぐりたい。

【最近の若者気質と目標設定スキル】

原理・原則はあくまで基本的なものであり、個人やチームや諸々の条件によって変わってくる。最近の若者気質ともいえる価値観の多様化とか主体性や協調性の欠如などにふれながら、目標設定スキルについて考えてみる。

特に、主体性の欠如、指導者に依存する傾向がよく問題にされる。なかでも女子はその傾向が強いといわれる。あくまで目標設定は個人が主体的に行うものである。個人種目の場合は、比較的各自の能力や技術に必要なトレーニングメニューで達成度がチェックされながら実践していくことが可能であるが、ことチーム種目の場合は、チームとしての個の役割に応じた目標設定をしていく際に、個を尊重しつつチームを大切にという部分では、指導者としての重要な役割がそこに存在する。

チーム目標にむかって各個人が自分の役割に意義を感じて主体的に実行する時にこそ強いチームが生まれる。指導者やリーダーは目標の共有化をはかり、メンバーに役割責任を自覚させることがきわめて大切なことである。

2. 各種関連学会の大会開催予定

本年度9月から向こう1年間に開催される国内・国外の関連学会をお知らせいたします。

国内・国際関連学会開催一覧（1994年9月～1995年8月）

学会名	大会	期日	会場
国内学会関係			
日本応用心理学会	第61回大会	9/9（金）～10（土）	城西大学
日本臨床心理学会	第13回大会	9/23（金）～25（日）	京都女子大学
日本心理学会	第58回大会	10/2（日）～4（火）	日本大学文理学部
日本体育学会	第45回大会	10/4（火）～6（木）	山形大学
日本社会心理学会	第35回大会	10/9（日）～10（月）	関西大学
日本健康心理学会	第7回大会	10/15（土）～16（日）	神戸女子大学
日本ストレス学会	第61回大会	11/1（火）～2（水）	日本都市センター
日本スポーツ心理学会	第21回大会	11/17（木）～18（金）	四日市市文化会館
国際学会関係			
アジア大会 スポーツ科学会議	第12回大会	9/25（日）～27（火）	広島市
南太平洋アジア スポーツ科学会議	第2回大会	平成7年 1/12（木）～15（日）	香港
北米スポーツ心理学会	'95年大会	平成7年6月上旬	?（アメリカ）
アメリカ応用 スポーツ心理学会	第10回大会	平成6年10月頃	ニューオリンズ （アメリカ）
ヨーロッパスポーツ 心理学会議	第9回大会	平成7年 7/4（火）～9（日）	ブリュッセル （ベルギー）
ICHPER, SD	第38回大会	平成7年 7/9（日）～16（日）	フロリダ（アメリカ）
ユニバーシアード 大学スポーツ研究会議		平成7年 8/24（木）～26（土）	福岡市

Ⅲ. 地区別研究活動報告

1. 関西地区

1) 体育心理学例会（平成5年度）

世話人 滝 省治 甲子園大学

連絡先 651-13 神戸市北区藤原台南町5-17-5 Tel : 078-982-5509

会員数 43名

第1回目（平成5年3月12日、阿倍野荘）

「Stearns & Robertsの『応用スポーツ心理学的研究の将来の方向』を読んで」

鈴木 壮（岐阜大学）

第2回目（平成5年5月14日、以和貴荘）

「スポーツコンディショニングに関する心理的考察－柔道選手の場合－」

荒木雅信（大阪体育大学）

第3回目（平成5年7月2日、以和貴荘）

「高齢者の体力テストに関する研究」 古谷 学（大阪リハビリテーション専門学校）

第4回目（平成5年10月22日、大阪体育大学大阪事務所）

「量的研究から質的研究へ」

岡沢祥訓（奈良教育大学）

第5回目（平成5年12月10日、以和貴荘）

「身体活動の心身機能に及ぼす影響について－体育実技とジョギング－」

滝 省治（甲子園大学）

2) 夏期合宿研究会

日時：平成5年8月28日（土）～29日（日）

場所：大阪体育大学

1日目

ゴルフコンペ（庄司ゴルフクラブ）

研究発表

「バスケットボールのシュートにおける心理的研究」 鶴原清志（三重大大学）

「運動強度と気分の関係について」 西 和任（三重大大学教育学研究科）

「スポーツ科学トレーニングセンターについて」 岸 順治（スポーツ科学トレーニングセンター）

懇親会（浪商倶楽部、犬鳴温泉）

2日目

テニス大会（大阪体育大学テニスコート）

研究発表

「運動スキルの二重構造について」

荒木雅信（大阪体育大学）

「走幅跳のバーの高さの知覚判断について」

兄井 彰（福岡大学）

2. 九州地区

第7回 九州スポーツ心理学会

世話人 徳永幹雄 九州大学健康科学センター

連絡先 816 春日市春日公園6-1 九州大学健康科学センター Tel:092-573-9611

テーマ：メンタル・コンディショニング

日時：平成6年3月12日（土）

会場：福岡大学セミナーハウス

参加者数：54名

研究発表

1. 口頭発表

「体育学部生の自己概念形成に関する研究」

山本勝昭（福岡大学）

「高齢者の競技スポーツと生きがい効果」

秦泉寺尚（宮崎大学）

「スポーツにおける皮膚温・筋電図バイオフィードバックの基礎的研究」

園田順一（鹿屋体育大学）

「体温調節能の個人差と気質との関連に対する運動の効果」

山内正毅（長崎大学）

2. ポスター発表

「第10回世界ベテランズ陸上大会参加者の運動能力調査の効果」

谷口幸一（鹿屋体育大学）

「児童期における運動学習による自己効力感の変容」

磯貝浩久（九州工業大学）

「高校野球選手におけるバーンアウトと関連要因について」

宮城政也（鹿屋体育大学大学院生）

「一流競技選手の競技特性不安について」

高柳茂美（九州大学）

特別講義

「カウンセリングとしてのスポーツ指導のあり方」

司会：今中国泰（長崎大学）

講師：藤原勝紀（九州大学教養部教授）

シンポジウム

「スポーツ指導におけるメンタル・コンディショニングについて」

司会：橋本公雄（九州大学健康科学センター）

演者：岩崎健一（熊本大学教養部教授）　－メンタルトレーニングについて－

滝口裕子（福岡スイミングクラブコーチ）　－現場指導者から－

松尾哲矢（福岡大学体育学部講師）　－バーンアウトについて－

特別企画

「優勝監督に聞く」

司会　山中　寛　（鹿児島大学）

講師　田中国明　（福岡大学附属大濠高校バスケットボール部監督、同校教諭）

平成5年度国民体育大会バスケットボール競技少年男子優勝

平成5年度全国高校選抜バスケットボール大会優勝

IV. 研究室めぐり（その1）

鹿屋体育大学スポーツ心理学研究室

谷口幸一（鹿屋体育大学）

鹿屋^{かのや}体育大学が国立大学で唯一の体育系単科大学として開校し第一回の入学生を受け入れたのが、1984年（昭和59年）4月であった。以来今年で丸10年が経過した。

スポーツ心理学教室では、学内外の教育研究環境の変遷の中であって、その折々の小波を受けつつ教育研究活動を行ってきた。

1. 研究室の研究の動向

当研究室では1990年、生涯にわたる身体活動（運動・スポーツ活動を含む）と健康体力の問題を研究するために地域住民に対する継続的研究（通称：Kanoya follow-up study）を開始した。鹿屋市一町の30歳以上の約千人の住民を母集団として、年一度秋期に調査測定を継続し今年で5年目を迎える。調査への継続協力者は数百人であるが、研究の趣旨をよく理解してもらい、町ぐるみの協力体制ができつつある。数年後の研究成果の公表を期して目下、調査結果のデータベース化を進めている。

本研究室のゼミ活動に、現在12名の学部学生（3、4年生）が所属している。彼等の興味は、やはり自己のスポーツ経験に基づくメンタルトレーニング、競技意欲、性格、クラブ集団のリーダーシップ特性などに関する課題が多く、実際にこれらに関連するテーマの卒業論文を多く製作している。平成5年度までに、約60名のゼミ生が本研究室から巣立った。彼らの約半数は現在、中高の教員として活躍している。

昭和63年度に本学に大学院体育学研究科（修士課程）が設置され、3コース（スポーツ科学、社会体育学、コーチ学）に現在、約35名の学生が在籍している。スポーツ心理学は、コーチ学コースの主教科に位置づけられているが、現在までにスポーツ心理学に関連した研究テーマで6名（4名は他大学出身者）が修士の学位を取得し、目下の在籍者は5名（他大学出身者1名）である。スポーツ心理学関連科目担当教員（併任）は、園田順一教授と筆者の2名である（森司朗教官、本年4月転出）。教員の専門分野に応じた指導が中心となり、園田教授がスポーツの臨床心理学的側面の研究指導を、筆者が発育発達、特に中高年者を対象とした生涯スポーツ活動に関連した心理学的研究の指導を行っている。両教員の指導分担は補完的關係にあるが、主指導教官の選択は学生の自由意思に任せている。修了生の修論テーマの過半数は、競技スポーツに関するものである。6名の修了生の進路は、中学校教員1名、公私立専修学校教員2名、民間フィットネス研究所研究員1名、大学講師（非）1名、大学院研究生1名である。全国的な大学

教養部改組の波を受けて、本学の大学院修了生の就職先の多様化も避けられない現状にある。特に伝統のない新設の大学だけに、卒業生の進路は厳しいものがある。他大学の先生方のご指導、ご教示を切に願う次第である。

2. 他大学との交流

本学の開校以来、全学的研究交流の一環として国際シンポジウムが数回開催された。その折、スポーツ心理学関係の研究者として、松田岩男先生（故・前日本体育学会会長、スポーツ心理学会会長）が数度に渡り来学され多大の啓発を受けた。特別講師として、三島二郎先生（前早稲田大学教授）、R.Suinn 教授、武田健先生（関西学院大学教授）、上田雅夫先生（早稲田大学教授）、徳永幹雄先生（九州大学教授）、杉原隆先生（東京学芸大学教授）らが来学された。その他、数大学の先生方との研究交流を行ってきた。

九州地区の体育学会として、九州体育学会がある。その第41回年次大会が1992年9月に本学で開催され、本研究室はその事務局として運営の中心的役割を果たした。

また九州地区のスポーツ心理学関係者の学会として「九州スポーツ心理学会」（佐久本稔会長、福岡女子大学）がある。九州大学、福岡大学を中心として本年度で第7回大会を迎えた。当教室からも例年、数名が参加し活発に研究発表を行っている。身近な研究交流の機会として当教室にも大きな影響を与えている。

3. スポーツトレーニング教育研究センター

本年5月、本学に「スポーツトレーニング教育研究センター」が開設された。これは青少年期の運動・スポーツ活動の健全な発展を期して、発育発達期の科学的なトレーニング方法や指導方法の開発と啓蒙を目指したセンターである。3名の研究員が新たに配属される予定であるが、内1名は青少年スポーツの指導に見識の高い運動心理学の専門家が配属される予定である。



V. 海外だより（その1）

フロリダ大学に留学して

高妻容一（近畿大学）

昨年4月より今年の3月までの1年間、米国のフロリダ大学(University of Florida)において、Health and Human Performance学部のExercise and sport Sciences学科に研究留学をすることができた。ここには元国際スポーツ心理学会(ISSP)会長で現米国心理学会(APA)スポーツ心理部門の会長を務めるシンガー教授、運動学習分野を研究するタネント教授とクーラー助教授、そして米国オリンピック柔道チームのスポーツ心理学者でもあるマーフィー教授の4人がスポーツ心理・運動学習のスタッフとしている。他にも運動生理学、健康・体力、レクリエーションの分野でも著名な研究者がいる。

この大学は全米でも5番目ぐらいに大きな大学で、スポーツ施設などを見ると日本でも大きいといわれる近畿大学に比べても5～10倍は違うほど整備されている。キャンパス内にあるゴルフ場、東京ドームと同形式の気圧による体育館、5つもある体育館、6つあるプール、3～4ヶ所にある30～40面もあるテニスコート、7～8万人は入るアメリカンフットボール場、野球場、400mタータントラック、ラケットボール場、学生が自由に使える3～4ヶ所のグラウンド・広場、学生専用（数ヶ所）・教職員専用・クラブ専用のウェイトトレーニング場、武道場などとても文書では紹介しきれないすばらしい施設がある。他にも学内にある2つの大学ホテル、ボーリング場、発電所、野生のワニが数百匹はいる湖などとにかくケタが違うのである。

私の机を用意してくれたMortor Behavior Lab.では、7台のコンピューターやいろいろな実験器具が置いてあり、スポーツ心理学や運動学習専攻の大学院生達が研究や勉強に取り組んでいた。ここでは大学テニス部の選手などを被験者にアイカメラを使用したVisual Researchが運動学習の実験として行われていた。またスポーツ心理専攻の学生もいろいろな実験や研究に従事していた。米国ではグラント（研究費）を学外から取ってくる事が重要で、それによって実験器具を買ったり、大学院生をリサーチアシスタントとして雇ったりしている。学生は、授業と研究、そして仕事（ティーチングアシスタントなど）と忙しく活動していた。興味のあることにマグニコフ博士というロシアの脳波の専門家を雇い、脳波計をはじめとする生理学的指標を使った研究も行っていた。さらにこのLab.のとなりに運動生理学実験室があり、ポロック教授をはじめとして多くの大学院生達が入りしていた。

この留学中に米国体育学会、北米スポーツ心理学会、国際スポーツ心理学会、米国応用

スポーツ心理学会、カナダスポーツ心理学会、そしてポリスアカデミー格闘技教官の学会などに参加した。特に北米スポーツ心理学会(NASPSA)は、スポーツ心理学よりも運動学習をはじめとする(Motor Learning, Motor Control & Motor Development)従来の研究を中心とした学会として発展し、量的研究の発表の場になっていると感じた。最近では、Exercise Psychologyの分野が多く研究者に興味をもたれ、発表やシンポジウムでもにぎわいを見せていた。一方、米国応用スポーツ心理学会(AASP)は、スポーツ現場での応用を中心とした質的研究の発表の場となっている。ここでは、スポーツの練習、試合、生活などでのスポーツ心理学の応用が強調され、この学会のメンバーはオリンピック、プロスポーツ、大学スポーツなど競技スポーツのコンサルタントに興味があるように感じた。具体的に分類すると、スポーツ心理学コンサルタントとして選手の心理的技術を向上させたり、コーチを助けたりすることを中心として研究や応用技術を発展させる部門、健康に関する心理学の応用部門、スポーツの社会心理学の応用に関する部門の3つから構成されている。北米スポーツ心理学会は、日本体育学会の体育心理部門や日本スポーツ心理学会と同じ形式であり、内容的にもほとんど変わりはないように感じた。そこで、日本にはない形式である米国応用スポーツ心理学会を簡単に紹介したいと思う。私はこの学会発足当時のメンバーでもあったが、実際に参加したのははじめてであった。私は「衝撃」を受けたというのがこの学会の感想である。つまり、「応用」という面において日本にも必ず必要な学会だという思いからである。内容は国際メンタルトレーニング学会会長のオーリック氏のスポーツ心理学コンサルタントに関する講演から始まり、プロスポーツに対するコンサルタント、大学スポーツに関する問題、量的研究に対するシンポジウムなど選手、チーム、コーチ、そして運営・管理者を対象にした具体的な方法や成果が公開・発表されたりした。最も興味深かったのがプロテニス選手、プロ野球選手、プロアイスホッケー選手、陸上競技オリンピック選手に実際にこのようにして接し、話をし、問題を解決した、このようなプログラムを実施したなど具体的にセミナー形式でワークショップを行っていたことである。他にもオーストラリアのオリンピックチームへの応用やシステム、フロー、カウンセリング、ビジネスとしてのコンサルタントなどについても発表や討論があったが、研究の多くはポスターでの発表が主であった。

次に紹介したいのは、ポリスアカデミーの格闘技教官を対象とした学会においても、スポーツ心理学、メンタルトレーニングが活用されていたことである。アメリカの警察官は、犯罪大国にあって死亡率の高い職業であり、毎日が戦争のような状態である。彼らが死と隣り合わせのプレッシャーやストレスのもとでどう気持ちをコントロールしながら仕事を遂行しているのかは、一流スポーツ選手と比較したとしても想像を絶するものがある。

最近ではエイズ感染者の犯罪率が多くなり、逮捕や事故の処理、拳銃の使い方などにおい

ても細心の注意と知識が必要である。特に心理的準備に関しての応用テクニックは、なるほどと思うものであり、彼らの眼光の鋭さ、動作や反応の仕方を見ていると、何か昔の武士はこのような感じではなかったのではないかと感じてしまう。「武士道とは死ぬことと見つけたり」というような心理的準備の感じがするのである。

またフロリダ大学の大学院の授業を1年を通していろいろと受講した。その中でスポーツ心理学や運動学習などの授業においては最新の情報や研究について講義が行われていた。特に興味深かったのが「質的研究と量的研究」についての討論がかなり行われていたことであった。最近では、応用スポーツ心理学会を中心としたメンバーによって質的研究が盛んに行われているからである。このことについては学者や研究者の間でも賛否両論が盛んに討論されている。他にもいかにして研究費を学外から取ってくるかなどを授業で行っていた。このことはアメリカの研究者にとってかなり深刻な問題でもあるのである。

最後に、この1年間の海外留学において、多くの情報を集めることが出来たし、北米でのスポーツ心理学の応用に関する発展のスピードが日本の何倍もの勢いであることを肌で感じた。アメリカ、カナダ、ポルトガルでの学会にも参加したことで多くの研究者との交流もできた。また私のメンタルトレーニングプログラムに関するセミナー（12回）にも毎回15名の大学院生達が参加してくれ、現場での応用や日本でのメンタルマネジメントプロジェクトなどに興味を示してくれた。これからは日本でもスポーツ心理学の応用に関するセミナーなどをどんどん開かなければならないと感じたし、今後は日本の学会も従来のものと、応用の方向へ進展するものが共存することが予想される。さらに選手やチームと契約を結び、ビジネスとしてスポーツ心理学コンサルタントを行う人々も増えていくであろう。

エモリー大学に留学して

森 司郎（東京学芸大学）

この度、次の夏期オリンピックの開催地である、アメリカ合衆国のジョージア州アトランタ市にあるエモリー大学で、文部省在外研究員として研究生活を送ることができた。同大学においてはYerkes regional primate research centerのNeurobiology分野に所属し、Dr. Johanness Tigges教授、Magarett Tiggess教授の指導の下で視覚の基本的なメカニズムの研究としてチンパンジーの視覚野に関する研究を行なうとともに、同大学心理学部心理学部教授のNeisser教授から、生態学的なアプローチを通しての知覚メカニズム、運動と知覚の関連などに関する基本的な考えかたを学ぶことができた。



エモリー大学は「風とともに去りぬ」で有名なアトランタの郊外にある1836年に創設された歴史のある大学で主に医学部、法学部が有名な大学である。この大学の大きなスポンサーとして、日本でも有名なコカコーラがあり、建造物の多くがコカコーラの援助を受け、それにちなんだ名前がつけられていた。もともと、アトランタの町自体、コカコーラの町と言っても過言ではないくらい、コカコーラと共存している感じがする町である。また、アトランタは次回のオリンピックの開催地でもあり、地元新聞やテレビでのカウントダウン、ボランティアの募集、オリンピックグッズの販売、イベントの開催など徐々にオリンピックムードが高まっていた。

私が所属し、研究活動を行なった研究所は医学部の付属の施設で、各分野の専門家がチームを組んでいろいろなテーマに取り組んでいた。私の所属した研究室では白内障、弱視に関する研究や、脳の老化に関する研究について、神経解剖学、心理学、生理学、眼科医、組織学などの専門家がチームをつくって研究していた。また、その他の研究室においてはエイズ研究や乳幼児の突然死、コカインを常用した母親から生まれた子どもへのコカインの影響、言語学習など色々なテーマについて研究が行なわれていた。

このような幅広い研究が行なわれている研究所において、今回の私の在外研究の研究テーマである運動の認知メカニズムに関して研究を行った。この研究の第1のステップとして知覚の分野、特に、視覚の分野と運動の関係が重要だと考えられる。運動の技能を獲得する場合、どの様にその運動技能が見えるか、知覚されるかということは認知メカニズムにおいて基本的な要因である。これら認知のメカニズムの解明においては認知心理学的なアプローチと同時に脳内における基本的な知覚のメカニズムに対するneuroscienceからのアプローチも必要と考えられる。そこで、脳内における知覚メカニズムの中でも特に運動の認知と関係する視覚に関して基本的なデータを得るため、さらにneurobiologyの立場

からの基礎的な研究を行なった。

視覚の研究においては、具体的には視覚野である大脳皮質の17野に関して、最近、空間や色の知覚に重要な機能を果たしているといわれる"blob"とその周辺の"interblob", 視覚の機能に重要な関連性を持つといわれているneuropeptide Y (NPY)というneuronに関して、人間に最も近い動物であるApesの中から言語理解やその他の学習実験などでかなりの知的開発が認められるチンパンジーに関して実験を行なった。この視覚の機能、特に"blob"の機能の一つである空間の認知は、運動の理解に関して欠くべからざる分野であり、この研究はこの分野の理解における基本的な情報を提供してくれた。同時にNPYはこれら視覚野のコントロールの他、摂食行動のコントロールや記憶に関する重要な機能も果たしていることがこれまでの研究において報告されており、知覚と重要な関わりを持つNPYの研究は知覚のメカニズムの理解における基本的な情報を提供してくれた。また、発達段階でコンタクトレンズなどを用いて、視覚入力のコントロールを行なうことで視覚野の発達に違いが見られ、知覚においても影響が見られるという研究の資料など、その他多くの視覚に関する研究の資料、実験の観察などを行なうことができ、研究のための貴重な経験を積むことができた。

また、認知のメカニズムに関しては、Neisser教授から多くの示唆をいただいた。特に、知覚システムに関しては今回の渡米の目的を果たす上で重要な知見を得た。つまり、従来の知覚システムを概観した場合、大きく2つの立場が存在すると考えられる。一つは、生態学的な立場である直接知覚の立場と一般的な認知心理学の立場である再認の立場である。しかしながら、これらの2つの立場はこれまでお互いが独立の立場で主張しあい、お互いが相入れない関係にあった。しかしながら、これらは、お互い共存して、人間の認知を形成しているのである。特に、運動技能はこれらの立場で考えると直接知覚の範疇におさめられるが、獲得した運動技能をイメージとして表象する場合はむしろ再認だと考えられる。これら2つは、共存はするがお互い別々に存在している。前述した視覚の研究はこの立場で考えると直接知覚の構造になる。このことは、運動の認知のメカニズムはこれらの2つの知覚システムから構成されており、さらに脳内における機能の分極を示唆している。

これらの研究結果は、運動技能を指導していく場合、技能の特性を2つの立場から分析し、それぞれの特性に関して指導の強調点を置いていくことがより効果的な指導に繋がることを示唆している。

21世紀は「脳」の時代ともいわれている。脳の研究は色々な角度から目覚ましい発展をしているが、まだ始まったばかりである。むろん、運動と脳の関係もこれから徐々に解明されていかねばならないテーマだと思う。

VI. そ の 他

1. 博士号取得者紹介

体育心理学専門分科会に所属されておられる方で、1989年度から1993年度までの過去5年間に博士号を取得された方の氏名ならびに研究テーマをご紹介します。なお、これは事務局で調査した範囲内で分かった方々ですので、漏れている方々もおられるかと思っています。もしそのような方がおられましたらご一報ください。次回の会報で御紹介させていただきたいと思っています。

三木ひろみ 筑波大学

取得大学・年 筑波大学（1993年） 体育科学博士

研究テーマ 対人競技における対戦相手に関する認知的方略の研究－対人認知過程の連続体モデルの応用－

金 明秀 筑波大学

取得大学・年 筑波大学（1993年） 体育科学博士

研究テーマ 学校運動部への適応における集団規範の研究

中込 四郎 筑波大学

取得大学・年 筑波大学（1992年） 体育科学博士

研究テーマ スポーツ競技者の同一性形成過程とスポーツ場面での危機様態における相互性の関連

今中 国泰 長崎大学

取得大学・年 The University of Queensland（1991年） Ph.D

研究テーマ Isolating the sources of the location-distance interference in motor short-term memory（運動短期記憶における位置距離干渉作用の生起機構）

吉田 茂 筑波大学

取得大学・年 筑波大学（1991年） 心理学博士

研究テーマ 視覚誘発電位の二元過程モデルと視覚特性

大石 和男 専修大学
 取得大学・年 東邦大学（1990年） 医学博士
 研究テーマ Prediction of body density using A-mode ultrasonoscope in Japan
 physical education major college students

佐久間春夫 国士舘大学
 取得大学・年 東邦大学（1990年） 医学博士
 研究テーマ C N Vの時間的空間的特徴とエラー反応

竹中 晃二 岡山大学
 取得大学・年 Boston University, School of Education（1990） Ed.D
 研究テーマ Effects of exercise in coping with acculturative stress

2. 体育心理学専門分科会選出の日本体育学会の役員

任 期：平成5年4月1日～平成7年3月31日

理 事：3名

杉原 隆 猪俣 公宏 上田 雅夫（順不同）

評議員 19名

杉原 隆	近藤 充夫	中込 四郎	伊藤 政展
猪俣 公宏	上田 雅夫	石井 源信	勝部 篤美
加賀 秀夫	徳永 幹雄	市村 操一	麓 信義
藤田 厚	船越 正康	藤善 尚憲	調枝 孝治
岡沢 祥訓	丹羽 劭昭	岡村豊太郎	

（順不同）

3. 体育心理学専門分科会の事務局の変遷

体育心理学専門分科会が発足してからの事務局の変遷について、下記に示すと以下のとおりです。

表1 事務局の変遷

期間	事務局	世話人
昭和42年～昭和51年(10年間)	東京教育大学	鈴木 清、松田岩男、近藤充夫 市村操一、杉原 隆
昭和52年～昭和55年(4年間)	日本体育大学	長田一臣、円田善英、西條修光
昭和56年～昭和60年(5年間)	大阪教育大学	柏原健三、船越正康、中川 昭
昭和61年～昭和62年(2年間)	順天堂大学体育学部	太田哲男、星野公夫
昭和64年～平成4年(5年間)	早大人間科学部	上田雅夫、山崎勝男
平成5年～	九州大学健康科学センター	徳永幹雄、橋本公雄、高柳茂美

4. 体育心理学専門分科会会報一覧（1967～1994 年）

事務局に在庫の会報はつぎのとおりです。巻号は独自に付けてありますので、本号を通巻第34号とします。

表2 体育心理学専門分科会会報一覧

通巻	名 称	号	発行年月日	代表者	編集者
1	曲り角	1号	（不明。お持ちの方は御連絡ください）		
2	曲り角	2号	昭和42年12月	鈴木 清	松田・近藤
3	曲り角	特報	昭和43年5月	鈴木 清	松田・近藤
4	曲り角	3号	昭和43年10月	鈴木 清	松田・近藤・杉原
5	曲り角	4号	昭和43年11月	鈴木 清	松田・近藤・杉原
6	曲り角	5号	昭和43年12月	鈴木 清	松田・近藤・杉原
7	曲り角	1,2号合併	昭和44年7月	鈴木 清	松田・近藤・杉原
8	曲り角	1号	昭和45年6月	鈴木 清	松田・杉原
9	曲り角	2号	昭和45年9月	鈴木 清	松田・杉原
10	曲り角	1号	昭和46年11月	松田岩男	近藤・市村・杉原
11	曲り角	2号	昭和46年12月	松田岩男	近藤・市村・杉原
12	曲り角	1号	昭和47年4月	松田岩男	近藤・市村・杉原
13	曲り角	1号	昭和48年7月	松田岩男	近藤・市村・杉原
14	曲り角	1号	昭和49年7月	松田岩男	松田・杉原
15	曲り角	2号	昭和49年9月	松田岩男	松田・杉原
16	曲り角	1号	昭和50年4月	松田岩男	松田・杉原
17	曲り角	1,2号	昭和52年10月	松田岩男	長田・円田・西條
18	曲り角	1,2号	昭和53年12月	松田岩男	長田・円田・西條
19	曲り角	1号	昭和54年10月	松田岩男	長田・円田・西條
20	曲り角	特別号	昭和55年3月	松田岩男	長田・円田・西條
21	曲り角	1,2号	昭和57年3月	柏原健三	船越
22	曲り角	3号	昭和57年10月	柏原健三	船越
23	曲り角	1号	昭和58年3月	柏原健三	船越
24	曲り角	2号	昭和58年11月	柏原健三	船越
25	曲り角	1,2号	昭和59年7月	柏原健三	船越
26	曲り角	1号	昭和60年4月	柏原健三	船越・中川
27	曲り角	1,2号	昭和61年10月	柏原健三	船越・中川
28	曲り角	（1巻のみ会報はあるが、発行年ほかは不明。順天堂大学？）			

通卷	名 称	号	発行年月日	代表者	編集者
29	体 育 心 理 学 専門分科会会報	1 号	1989年 9 月(平成元年)	上田雅夫	山崎
30	体 育 心 理 学 専門分科会会報	2 号	1990年 6 月(平成2年)	上田雅夫	山崎
31	体 育 心 理 学 専門分科会会報	3 号	1991年 6 月(平成3年)	上田雅夫	山崎
32	体 育 心 理 学 専門分科会会報	4 号	1992年 6 月(平成4年)	上田雅夫	山崎
33	体 育 心 理 学 専門分科会会報	5 号	1993年 5 月(平成5年)	上田雅夫	山崎
34	体 育 心 理 学 専門分科会会報	6 号	1994年 8 月(平成6年)	徳永幹雄	橋本・高柳

5. 体育心理学専門分科会シンポジウム一覧

昭和35年（1960）～平成6年（1994）

回，年 （開催地）	メインテーマ	サブテーマ	演 者
11 昭和35年 （早稲田大学）	研究討論会 体育におけるパーソナリ ティ研究の動向	1. 主として日本の文献に よる研究 2. 運動学習とSocial Str essor への適応 3. MMPIによる女子バスケ ットボール選手の性格 に関する一考察 4. 運動選手の性格特性と “あがり”に関する研 究	丹羽 劭昭 （奈良女子大学） 末利 博 （愛知学芸大学） 青井水月ほか （東京大学ほか） 松田 岩男 （東京教育大学）
12 昭和36年 （名古屋大学）	体育におけるパーソナリ ティ研究の動向	1. スポーツによる精神的 変化 2. 運動部経験者の性格特 性についての追跡的研 究 3. 幼児の運動と人柄	小林 晃夫 （東京教育大学） 花田 敬一 （天理大学） 藤江 学 （東京工業大学）
13 昭和37年 （慶応大学）	体育における生徒指導 司会 小林 晃夫 （東京教育大学）	1. 運動能力と性格 2. スポーツにおけるパー ソナリティの問題 3. 性格に基づく体育の指 導	遠藤 辰夫 （福島大学） 太田 哲男 （順天堂大学） 柏原 健三 （大阪学芸大学）
14 昭和38年 （同志社大学）	第1回シンポジウム スポーツマンの性格特性 司会 松田 岩男 （東京教育大学）	1. 内田クレペリン法によ る研究 2. 矢田部・ギルフォード 性格検査による研究 3. MMPIによる選手の性格 の比較	近藤 充夫 （東京教育大学） 杉本 功介 （日本大学） 平田 久雄 （中京大学）

回, 年 (開催地)	メインテーマ	サブテーマ	演 者
15 昭和39年 (日本大学)	スポーツマンの性格特性 について 司会 小林 晃夫 (東京教育大学)	1. MMPIによる検査結果を 中心として 2. 各種検査の結果から 3. TSPIによる検査結果を 中心として	飯田 颯男 (都立両国高校) 武田 徹 (中京大学) 大川 信明 (早稲田大学)
16 昭和40年 (北海道大学)	運動の学習過程について (キネオロジーと合同) 司会 柏原 健三 (大阪学芸大学)	1. “蹴上がり”の習熟過 程の筋電図的研究 2. 投球動作の学習過程の 筋電図および映画分析 による研究 3. 授業における運動の学 習過程 4. タイミングの学習 5. 視知覚と身体の位置感 覚とのインターアクシ ョンを中心として 6. 学習効果に対する集団 構造の影響—研究上の 問題点をめぐって—	岡本 勉 (関西医科大学) 森下はるみ (立正学園短大) 田中 久雄 (富山大学) 藤善 尚憲 (天理大学) 藤田 厚 (日本体育大学) 小林 篤 (九州大学)
17 昭和41年 (東京大学)	運動学習研究の諸問題 司会 松田 岩男 (東京教育大学)	1. 今日の運動学習の問題 と方法 2. 運動学習における認知 の方法 3. タイミングコントロー ルと運動学習 4. 運動学習における禁止 について	太田 哲男 (順天堂大学) 藤田 厚 (日本体育大学) 山田 久恒 (名古屋大学) 近藤 充夫 (東京教育大学)

回, 年 (開催地)	メインテーマ	サブテーマ	演 者
18 昭和42年 (大阪大学ほか)	運動学習における諸問題 —技術習得過程における イメージの役割— 司会 末利 博 (京都教育大学)	1. 知覚—運動学習におけ る距離・角度イメージ 形成におよぼす運動機 能使用の効果 2. イメージ関連からみた 運動におけるフォーム の学習および反応時間 における予期の問題 3. GSR を通してみた運動 イメージ構成について 4. スキー実技指導におけ る示範の意義	加賀 秀夫 (順天堂大学) 鷹野 健次 (大阪体育大学) 勝部 篤美 (名古屋大学) 高村 健二 (青山学院大学)
19 昭和43年 (東海大学)	運動学習に関する諸問題 —運動学習の個人差— 司会 鈴木 清 (東京教育大学)	1. 個人差を決定する要因 2. 緊張特性からみた個人 差について 3. 反応時間における個人 差 4. スキル学習における個 体内変動の重要性につ いて	渡辺 俊男 (お茶の水女子大 学) 上田 雅夫 (早稲田大学) 杉本 功介 (日本女子体育大 学) 調枝 孝治 (横浜国立大学)
20 昭和44年 (広島大学)	スポーツカウンセリング とスポーツセラピー 司会 清原 健司 (早稲田大学)	1. スポーツカウンセリン グの諸問題 2. スポーツカウンセリン グやスポーツセラピー における体育教師の役 割 3. 分裂病患者を指導して 4. 態度変容の手がかりと しての持久走 5. 射撃における心理負荷 について	太田 哲男 (順天堂大学) 徳永 幹雄 (九州大学) 中村 章 (愛媛大学) 平山 正徳 (小田原少年院) 松本太刀雄 (日本ライフル協 会)

回, 年 (開催地)	メインテーマ	サブテーマ	演 者
21 昭和45年 (国士館大学)	スポーツセラピーをめぐって—事例と理論— 司会 清原 健司 (早稲田大学) 太田 哲男 (順天堂大学)	1. 精神科医療における体育的働きかけ 2. 体育療法—ゆさぶり— 3. 分裂病患者のダンスセラピー 4. 肢体不自由者の動作トレーニング	一宮 祐子 (川越同任会病院) 中井 忠男 (慶応大学) 武井 正子 (順天堂大学) 木村 駿 (群馬大学)
22 昭和46年 (日本体育大学)	体育心理学研究の課題 司会 松田 岩男 (東京教育大学)	1. スポーツと人格に関する研究の問題点 2. これまでの知覚運動学習の研究動向とこれからの課題 3. 体育心理学の分野における研究の動向	末利 博 (京都教育大学) 調枝 孝治 (横浜国立大学) 竹村 昭 (奈良学芸大学)
23 昭和47年 (福岡大学)	幼児期における運動遊戯の意義 司会 末利 博 (京都教育大学) 勝部 篤美 (名古屋大学)	1. 運動感覚の発達の見点から 2. 社会化の見点から 3. 自我の発達の見点から	近藤 充夫 (東京教育大学) 鈴木 重夫 (堀田若草幼稚園) 勝部 篤美 (名古屋大学)
24 昭和48年 (中京大学)	運動技術の習熟過程について(運動生理学、キネオロジー、心理学の合同) 司会 渋谷 侃二 (東京教育大学) 金子 公宥 (大阪教育大学)	1. 筋の作用機序からみた運動技術の習熟過程 2. 模擬動作による運動技術の習熟過程について 3. 動作習熟過程による脳波変動について 4. 内野手の投球動作の習熟過程について 5. 運動技術の習熟過程に關与する心理的要因	熊本 水頼 (京都大学) 前嶋 孝 (順天堂大学) 荻原 仁 (広島大学) 松永 尚久 (東京工業大学) 鷹野 健次 (大阪体育大学)

回, 年 (開催地)	メインテーマ	サブテーマ	演 者
25 昭和49年 (東京工業大学)	体育における態度変容の問題 司会 加賀 秀夫 (筑波大学)	1. 身体活動が感情や認知に及ぼす影響－態度変容における均衡理論の立場から－ 2. 学生の体育実技に対する態度変容とその要因 3. 自己認知変容－スポーツ臨床心理学の立場から－	丹羽 勘昭 (奈良女子大学) 徳永 幹雄 (九州大学) 長谷川浩一 (青山学院大学)
26 昭和50年 (天理大学)	身体活動に対する態度形成をめぐる諸問題 司会 上田 雅夫 (早稲田大学)	1. 運動に対する態度形成の社会心理的考察 2. 運動に対する好き嫌いの発達の分析 3. 勝敗に対する態度とパーソナリティーの関係 ※体育学研究の成果と課題(体育心理学)－課題研究	片岡 睦夫 (筑波大学) 兵頭 寛 (愛媛大学) 石井 源信 (中京女子大学) 和田 学 (大阪大学) 鷹野 健次 (大阪体育大学)
27 昭和51年 (東北大学)	運動に対する興味を探る 司会 藤善 尚憲 (天理大学)	1. 運動嫌いの要因・寄与率と行動傾性からの考察 2. 興味の意味と青年期における興味の特徵 3. 興味の解釈・構造－社会人における運動・スポーツの興味	佐久本 稔 (福岡女子大学) 杉原 隆 (筑波大学) 調枝 孝治 (広島大学)
28 昭和52年 (山梨大学)	子供の心身の発達と学習 司会 円田 善英 (日本体育大学)	1. 幼児の知覚－運動経験と知的発達 2. 生活・社会環境と身体的認識の発達 3. からだづくりと意欲の問題	近藤 充夫 (東京学芸大学) 藤巻 公裕 (埼玉大学) 田中 鎮雄 (日本大学)

回, 年 (開催地)	メインテーマ	サブテーマ	演 者
29 昭和53年 (高知大学)	子供の心身の発達と学習 ー運動学習と感覚ー 司会 末利 博 (京都教育大学)	1. 全身選択反応におよぼす学習の効果ー発達からみたー 2. 運動遂行に関係の深い感覚・知覚面の発達 3. 子供の運動適応と反応エラーの問題ー積極的に誤る能力の意義ー	藤田 厚 (日本大学) 千駄 忠志 (京都教育大学付属桃山小学校) 調枝 孝治 (広島大学)
30 昭和54年 (金沢大学)	運動学習研究の問題ー理論と実践のかかわり合い 司会 末利 博 (京都教育大学)	1. 運動学習理論の指導への適用をめぐる問題点 2. 授業を実践の対象とした運動学習研究のひとつの方向 3. 小学校の体育の授業での試みー運動する楽しさを知る子供達の学習からー	松田 岩男 (筑波大学) 阪田 尚彦 (岡山大学) 千駄 忠志 (京都教育大学付属桃山小学校)
31 昭和55年 (東京学芸大学)	運動学習研究の諸問題(2) 司会 近藤 充夫 (東京学芸大学)	1. 運動遅滞児をめぐるいくつかの問題ー運動遅滞児の学習・指導ー 2. 大学での実践から 3. 小学校での実践から	湯佐 清有 (横浜市立大学) 岡野 崇一 (新潟大学) 平林 宏美 (東京学芸大学付属世田谷小学校)
32 昭和56年 (神戸大学)	運動学習の諸問題(3) 司会 柏原 健三 (大阪教育大学)	1. 体力面から見た心身障害児の諸問題ー障害者の学習・指導: 肢体不自由児の場合ー 2. 指導者の立場から 3. 障害者の立場から	矢部京之助 (愛知県身体障害者コロニー研究所) 藤原進一郎 (大阪身体障害者スポーツセンター) 白井 正義 (会社員・プログラマー)

回, 年 (開催地)	メインテーマ	サブテーマ	演 者
33 昭和57年 (東京大学教養学部)	運動学習研究の諸問題(4) 司会 猪俣 公宏 (名古屋大学) 和田 尚 (京都教育大学)	1. 学習時の行動観察とその解釈についてーその方法論的課題:実践のための提案ー 2. 運動学習研究法の問題点 指定討論者	麓 信義 (弘前大学) 小林 篤 (奈良女子大学) 杉原 隆 (筑波大学)
34 昭和58年 (北海道大学)	運動学習研究の諸問題ー臨床心理学的アプローチの可能性ー 司会 加賀 秀夫 (お茶の水女子大学) 長田 一臣 (日本体育大学)	1. 身体運動の自己制御に対する心理学からのかわり 2. 運動学習の疎外要因への臨床心理学的アプローチの可能性を探る 3. 臨床心理学的アプローチの背景	星野 公夫 (順天堂大学) 財満 義輝 (広島修道大学) 中込 四郎 (筑波大学)
35 昭和59年 (鹿児島大学)	集中力をめぐる諸問題 司会 佐久本 稔 (福岡女子大学)	1. 集中力とは 2. 体育学習と集中力 3. 集中力のトレーニング	山本 勝昭 (福岡大学) 庭木 守彦 (熊本大学) 徳永 幹雄 (九州大学)
36 昭和60年 (岐阜大学)	集中力をめぐる諸問題(2) 司会 近藤 充夫 (東京学芸大学)	1. 現場の立場で問題となる「集中力」について 2. パーソナリティ研究の立場で問題となる「集中力」について 3. 運動学習論の立場で問題となる「集中力」について	石井 源信 (東京工業大学) 船越 正康 (大阪教育大学) 調枝 孝治 (広島大学)
37 昭和61年 (筑波大学)	集中力をめぐる諸問題(3)ー陸上競技フィールド種目における集中力ー 司会 市村 操一 (筑波大学)	1. 陸上競技のトレーニング体系における心理的準備のあり方 2. 陸上競技フィールド種目における集中力 3. 不 明	村木 征人 (筑波大学) 室伏 重信 (中京大学) 大西 暁志 (順天堂大学)

回, 年 (開催地)	メインテーマ	サブテーマ	演 者
38 昭和62年 (立命館大学)	学校体育・スポーツの問題と体育心理学研究の課題 司会 円田 善英 (日本体育大学)	1. 子ども・青年のからだ と心の実態－実態・変 化を追求する教育実践 をめざして 2. 体育の授業における 「認識」の課題 3. 運動経験と人格形成・ 人格変容に関する研究	石川 政士 (法政第二高校) 坂田 尚彦 (岡山大学) 中込 四郎 (筑波大学)
39 昭和63年 (福島大学)	体育学習における動機づ けのあり方 司会 杉原 隆 (東京学芸大学)	1. コンピテンス理論の立 場から 2. 原因帰属論の立場から 3. 運動目的・内容論の体 育の立場から	西田 保 (名古屋大学) 伊藤 豊彦 (島根大学) 細江 文利 (東京学芸大学)
40 平成1年 (横浜国立大学)	高齢者の健康観、価値観 を含む内発的動機づけ 司会 山崎 勝男 (早稲田大学)	1. 高齢者の生活意欲とそ の関連要因 2. 健康処方診断法と動 機づけ 3. 高齢者の欲求・価値観 の心理学的背景 4. 若者から見た高齢者の 健康観・価値観－高齢 者に対する若者の認識 について－	谷口 幸一 (鹿屋体育大学) 徳永 幹雄 (九州大学) 長田 久雄 (都立医療技術短期 大学) 今村 義正 (東海大学)
41 平成2年 (岡山大学)	スポーツ運動の心理的効 果について 司会 猪俣 公宏 (上越教育大学)	1. 運動生理学の立場から 2. 体育心理学の立場から 3. 精神病理学の立場から	田中 宏暁 (福岡大学) 岡村豊太郎 (山口大学) 白山 正人 (東京大学)
42 平成3年 (富山大学)	ストレスホルモンから運 動の心理的効果をさぐる －中高年の運動の意義－ 司会 徳永 幹雄 (九州大学)	1. ストレスホルモンと運 動 2. 心の健康と運動・ス ポーツ	岩根 久夫 (東京医科大学) 村越 真 (静岡大学)

回, 年 (開催地)	メインテーマ	サブテーマ	演 者
38 昭和62年 (立命館大学)	学校体育・スポーツの問題と体育心理学研究の課題 司会 円田 善英 (日本体育大学)	1. 子ども・青年のからだ と心の実態－実態・変 化を追求する教育実践 をめざして 2. 体育の授業における 「認識」の課題 3. 運動経験と人格形成・ 人格変容に関する研究	石川 政士 (法政第二高校) 坂田 尚彦 (岡山大学) 中込 四郎 (筑波大学)
39 昭和63年 (福島大学)	体育学習における動機づ けのあり方 司会 杉原 隆 (東京学芸大学)	1. コンピテンス理論の立 場から 2. 原因帰属論の立場から 3. 運動目的・内容論の体 育の立場から	西田 保 (名古屋大学) 伊藤 豊彦 (島根大学) 細江 文利 (東京学芸大学)
40 平成1年 (横浜国立大学)	高齢者の健康観、価値観 を含む内発的動機づけ 司会 山崎 勝男 (早稲田大学)	1. 高齢者の生活意欲とそ の関連要因 2. 健康処方診断法と動 機づけ 3. 高齢者の欲求・価値観 の心理学的背景 4. 若者から見た高齢者の 健康観・価値観－高齢 者に対する若者の認識 について－	谷口 幸一 (鹿屋体育大学) 徳永 幹雄 (九州大学) 長田 久雄 (都立医療技術短期 大学) 今村 義正 (東海大学)
41 平成2年 (岡山大学)	スポーツ運動の心理的効 果について 司会 猪俣 公宏 (上越教育大学)	1. 運動生理学の立場から 2. 体育心理学の立場から 3. 精神病理学の立場から	田中 宏暁 (福岡大学) 岡村豊太郎 (山口大学) 白山 正人 (東京大学)
42 平成3年 (富山大学)	ストレスホルモンから運 動の心理的効果をさぐる －中高年の運動の意義－ 司会 徳永 幹雄 (九州大学)	1. ストレスホルモンと運 動 2. 心の健康と運動・ス ポーツ	岩根 久夫 (東京医科大学) 村越 真 (静岡大学)

回, 年 (開催地)	メインテーマ	サブテーマ	演 者
43 平成4年 (大妻女子大学)	スポーツを通しての環境 教育の可能性を探る ー体育心理学の新たなパ ラダイムー 司会 市村 操一 (筑波大学)	1. スポーツと環境の摩擦 の反省の上に 2. スポーツと環境の共 存、そしてスポーツを 通しての環境教育	松村 和則 (筑波大学) 吉崎 満雄 (緑営グループ 会長)
44 平成5年 (大阪国際セン ター他)	より効果的なメンタルト レーニングを求めて 司会 星野 公夫 (順天堂大学) キーノートレクチャー 分科会30年の活動を顧み て将来を考える 司会 藤善 尚憲 (天理大学)	1. 競技における心理的構 えの有効性とその獲得 の仕方 2. メンタルトレーニング は現場の練習プログラ ムになぜ乗らないのか 3. 運動技能とこころの自 己コントロール ースポーツ選手のため の心理的トレーニング 演者 鷹野 健次 (川崎医療短期大学)	窪田 登 (早稲田大学) 徳永 幹雄 (九州大学) 成瀬 悟策 (九州大学)
45 平成6年	優れたスポーツ集団をつ くための心理的スキル 司会 船越 正康 (大阪教育大学) キーノートレクチャー スポーツ集団の生産性と 集団凝集性リーダーシ ップ 司会 杉原 隆 (東京学芸大学)	1. リーダーシップスキル 2. コミュニケーションス キル 3. 目標設定スキル 演者 丹羽 劭昭 (奈良女子大学)	飛田 操 (福島大学) 岡沢 祥訓 (奈良教育大学) 石井 源信 (東京工業大学)

(文責：徳永 幹雄)

VII. 事務局報告

1. 日本体育学会評議員選挙結果

平成6年3月4日付で体育心理学専門分科会選出の評議員の選挙を行いました。締切りの3月31日（木）後に開票の結果、次の19名を選出し、日本体育学会選挙管理委員会に報告いたしました。任期は平成7年4月1日～平成9年3月31日までです。なお、投票率は22%の低率でした。

荒木 雅信	石井 源信	市村 操一	伊藤 政展
猪俣 公宏	上田 雅夫	岡沢 祥訓	岡村豊太郎
工藤 孝幾	近藤 充夫	杉原 隆	調枝 孝治
徳永 幹雄	中込 四郎	丹羽 劭昭	橋本 公雄
藤田 厚	船越 正康	山本 勝昭	

2. 体育心理学専門分科会活動についてのアンケート結果

前事務局（早稲田大学人間科学部、上田雅夫・山崎勝男先生）の好意で事務局の移転通知とともに体育心理学専門分科会活動についてのアンケートを実施しました。554名に発送し、180名の回答で回収率は32.5%でした。かなりの低率でしたが、貴重なご意見をたくさん頂きました。回答を頂いた方には厚く感謝申し上げます。

新事務局としては、これらの結果を参考にして今後の活動を計画したいと思っています。アンケートの結果は次のとおりです。

表1 アンケート結果

	必 要	不必要	無記入
1) 学会時の懇親会	74(41.1%)	94(52.2%)	12(6.7%)
2) 一般発表の審査	99(55.0%)	70(38.9%)	11(6.1%)
3) キーノートレクチャーの企画	149(82.8%)	19(10.6%)	12(6.7%)
4) 合宿研修会等の企画	74(41.1%)	83(46.1%)	23(12.8%)
5) 「スポーツ心理学会」との 発表内容の区別	69(38.3%)	94(52.2%)	17(9.5%)
6) 各種研究会の推進と助成	130(72.2%)	31(17.2%)	19(10.6%)

7) 会報発行

表2 会報発行回数

1 回	2 回	3 回	無記入
107(59.4%)	59(32.8%)	8(4.4%)	6(3.3%)

会報の内容

海外情報、若い人の考えていること、レビュー、研究中のものの報告、各支部での発表、研究講演の話題、日本と世界の実情、国際交流、地方の活動と展望、現場指導に還元できるもの、会員・支部の活動動向、各地方の研究会のインフォメーション、トピック的なもの、共通目標の提示、一般会員向けの情報、文献紹介、発達・健康関係、プラス1回分は書評、内外の学会報告・研究の展望・学位論文の要約・その他ニュースレター的なもの。

8) シンポジウムの企画

表3 シンポジウムの企画

必 要	不必要	無記入
159(88.3%)	8(4.4%)	13(7.3%)

シンポジウムの内容

現場の声と指導者、授業に関すること、各トピックごとに複数のシンポジウム、長期的に展望し体育心理学から体育へ提言するようなテーマ、コーチングと人間関係、自主シンポジウム、タイムリーなもの、他の領域と複合した観点のもの、ディスカッションに重点を、体育心理学は何をめざすのか、体育学（学校体育）における心理的諸問題、スポーツ心理学の実践（事例）、ストレスとスポーツ（運動について）、教育現場での体育心理学の効用、近接の分科会との共催、テーマを絞って活発な討論が行われるもの、内容が連続的なもの、学術的なものや外国の新しい動向についてのもの、国内・国外の研究者・指導実践者のレクチャー、その時々的情勢に応じたもの、机上の理論に終わらせないもの、公募（分科会シンポジウムと一般シンポジウム）、体育心理学に関するいろいろなもの、現場に密着したテーマ、自主的なシンポジウムができないか、共通言語としての研究方法のワークショップ的なもの、スポーツでの自主訓練のようなもの（自主トレーニング）、現場の競技者へのカウンセリング、あるいはトレーニング処方事例発表。

9) 事務局への要望

- ・「体育学研究」に発表された心理領域に関する論文に対しての評論を募り、編集してほしい。
- ・体育心理学会に格上げして欲しい（スポーツ心理学会と一緒にしても可）。
- ・多様なインフォメーションが提示され、自由に意見が述べられるような活動体であることを望む。
- ・会費を値上げしてでも会報の発行を多くしてほしい。内容的には内外の研究の動向を中心にしてほしい。
- ・有料でもよいのでワークショップを行ってほしい（若い人を育てる）。
- ・体育学会では一般発表を全部ポスターにし、シンポジウム、キーノートレクチャー、ワークショップにバラエティ感を持たせてほしい。
- ・心理以外の分科会の現状等調べて参考にしてほしい。
- ・スポーツ心理学会心との違いを明確にしたほうが分かりやすいと思う（専門分科会にはいっているメリットを感じない）。
- ・会員との意思の疎通が大切なので、情報の収集と伝達に力を入れてほしい。
- ・研究成果の実践化への実態調査も必要である。
- ・体育心理学、スポーツ心理学の内容の重複部分はあるものの、明確な区分をし、シンポジウム・発表内容の整理が必要。例えば、体育心理学は体育学習、指導に関わる内容等を中心にしておくなど。

3. 体育心理学専門分科会総会議事録

日 時 平成5年11月18日（木）
場 所 大阪国際交流センター

報告事項

- 1) 事務局移転の件
- 2) 会員数に関する件
- 3) 会報第5号の発行に関する件
- 4) 専門分科会キーノートレクチャーに関する件
- 5) 専門分科会シンポジウムに関する件
- 6) アンケート結果の報告

審議事項

- 1) 1993年度収支決算
- 2) 1994年度予算案
- 3) 会報第6号の発行に関する件
 - (1) アンケートにもとづき、報告書から情報交換誌的色彩を強める
 - (2) タイトルを変更する
 - (3) 当分は年1回の発行とする
 - (4) スタイルはB5版、2段組、図表、写真挿入125ページ前後
- 4) 第45回大会シンポジウムについて
- 5) 第45回大会キーノートレクチャーについて
キーノートレクチャーを基調講演のような形にして、シンポジウムとペアにしてはどうか
→事務局に一任する
- 6) その他、学会の運営、形式について、以下のような意見が出された。
 - (1) 研究発表に審査が必要ではないか
内容にまで立ち入ることは出来ないが、形式審査は必要ではないか
 - (2) ポスター発表ができないか
 - (3) 発表9分、質問3分は短すぎる
 - (4) *スポーツ心理学と体育心理学専門分科会とを区別する必要があるかどうか
*体育を教育と考えるならばその必要はある
*スポーツ心理学と体育心理学専門分科会とを区別するのは、まだ現段階では不必要である

日本体育学会体育心理学専門分科会1994年度予算案

(1993. 11. 16～1994. 総会前日まで)

収入の部

前年度繰越金	843,619
分科会補助金	120,000
年会費	540,000
収入合計	1,503,619

支出の部

会報関連費

テープ起こし	90,000
会報印刷費	300,000
会報発送費	100,000

事務局事務費

文房具、コピー関連

発送業務、名簿整理等	150,000
------------	---------

通信費	150,000
-----	---------

シンポジウム関連経費

(93,94年度)	300,000
-----------	---------

予備費	413,619
-----	---------

支出合計	1,503,619
------	-----------

4. その他

1) 第45回日本体育学会専門分科会連絡会議

平成5年11月18日、大阪国際交流センター会議室で、平成6年度の大会について当番大学（山形大学）の担当者と日程などについて話し合った。徳永・橋本出席

2) 日本体育学会学会賞選考委員会委員の推薦

日本体育学会学会賞選考委員会委員長の改選にともない、体育心理学専門分科会より1名の候補者の推薦依頼が平成5年12月1日付けであった。事務局で検討の結果、調枝孝治（広島大学）氏を推薦した。

3) 体育心理学専門分科会の運営委員の依頼と分科会活動についての意見調査

平成5年度の体育心理学専門分科会の総会で承認された運営委員（本専門分科会が選出した日本体育学会の理事および評議員19名）に、委員の依頼と平成6年度のキーノートレクチャー、シンポジウム、大会前日のセミナー、懇親会、会報の発行および7年度の企画について、平成6年度3月末日まで回答していただくように連絡した。

4) 第45回日本体育学会での座長の推薦

第45回日本体育学会における専門分科会企画および座長候補者名簿について山形大学より提出依頼があった。キーノートレクチャーは丹羽劭昭（奈良女子大学）、シンポジウムは、司会：船越正康（大阪教育大学）、演者：飛田 操（福島大学）、岡沢祥訓（奈良教育大学）石井源信（東京工業大学）の各氏と座長候補者20名を平成6年4月7日付けで送付した。

5) 体育心理学専門分科会企画の発表要旨の提出

山形大学よりキーノートレクチャー、シンポジウムの発表要旨の提出依頼があった。5名の関係者に連絡し、回収した。5月31日付けで山形大学および各演者に要旨を郵送した。

6) 一般研究発表論文審査員の推薦

一般研究発表論文審査員の推薦依頼が日本体育学会から4月26日付けであった。本年度論文審査を行わない専門分科会からも審査員を推薦することが可能ということだったが、本専門分科会では推薦を行わなかった。なお、論文審査は次の分科会でされている。

体育原理、運動生理学、バイオメカニクス、体育経営管理、体育方法、スポーツ人類学。

7) 日本体育専門分科会支部長会

平成6年5月21日東京と岸記念会館で上記の会議が行われ、徳永・橋本が出席した。舞踊専門分科会新設に関する主意書とこれまでの経過説明があり、意見が求められた。結果的には認可されなかった。

また、学会のマンモス化に伴う大会開催の問題に関して、検討委員会の報告があった。現在学会員数が停滞ないし減少化の傾向があることや大学体育のおかれている現在の状況を考えると、これまでの大会の開催の方法を踏襲し、改善する方向で対応したほうが良いとの方針が語られ、意見が求められた。反対意見はなかった。

8) 平成7年度文部省審査委員（第一段階）候補者の推薦

学会本部から上記候補者の推薦依頼があり、事務局で検討の結果1名を推薦した。

編 集 後 記

本年5月発行予定の会報第6号、大変遅くなりましたが、難行苦行の末、漸くここに刊行する運びとなりました。

昨年の総会の席上、事前のアンケート調査にもとづき内容を変更する旨の事務局提案が了承されましたが、大枠その提案に添って編集致しました。会員の皆様の研究推進に少しでもお役に立てれば幸いです。

なお、本会報の作成に当り、多くの先生方からご意見、情報の提供、原稿の提出等々のご協力を頂きました。すべてボランティアでやって頂き無報酬でしたが、ありがとうございました。関係してくださった諸先生に厚く御礼申し上げます。

今後、さらに、内容のある会報にしていきたいと考えております。会員の皆様のご意見をお待ちしております。

(文責：橋本公雄)

日本体育学会体育心理学専門分科会会報 第6号(通巻第34号)

平成6年8月31日 印刷

平成6年8月31日 発行 (非売品)

発行責任者 徳永幹雄(代表)

〒816 福岡県春日市春日公園6-1

九州大学健康科学センター

TEL 092-573-9611 FAX 092-592-2866

発行者 日本体育学会体育心理学専門分科会事務局

印刷所 コロニー印刷

〒811-01 福岡県糟屋郡新宮町上府1592

TEL (092)962-0764
